

1 1
学 国 小 国 6 1 5

教育部
資料室
法財人団
文部省
検定済教科書
日本新教育研究会編修

国語

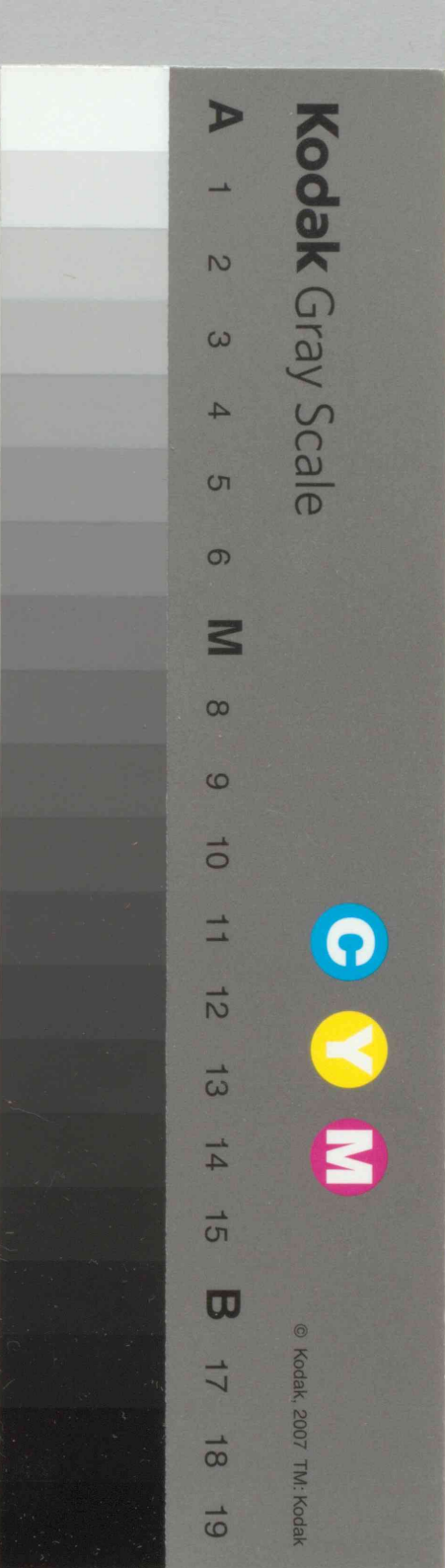
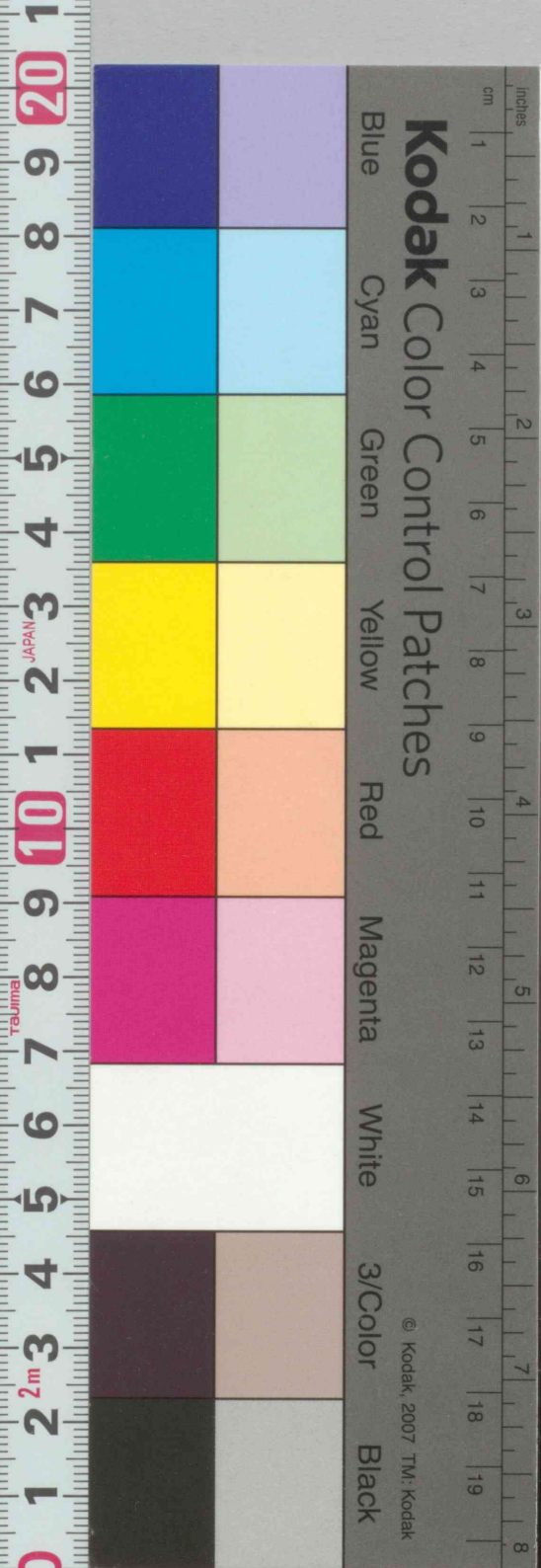
十一



小 KC
G16

学校図書株式会社発行

教
3
10



60380

教科書文庫

6
810
54-1950
01309
49689



寄 贈

中央図書館

昭和二十五年

月

日 文 部 省 検 定 小 学 校 国 語 科 用



教科書文庫
6
810
34-1950
0130449669

国 語 十 一

第 六 学 年 用 上 卷



廣 島 大 学 教 育 学 部 图 书

広島大学図書

0130449669



学 校 图 书 株 式 会 社

広島大学図書

0130449669





六

五

四

三

二

一

- (二) 山へ登ろう
- (一) 子ジカ物語
- (二) 子ジカ
- (三) シナリオ
- (一) ことばの研究
- (二) からだとことば
- (三) 目とことば
- (一) Mのつくことば

新しく出たことば
漢字
学習の手引

- もくろく
- (一) 春の光
- (二) 日光
- (三) ぼくのかいたおかあさんの顔
- (一) 母の日
- (二) お話二つ
- (一) 少年のクラブ
- (二) けむりのゆくえ
- (一) 博愛の天使
- (一) 登山
- (一) ピツケルの思い出

(1) (9) (10) (29) (24) (18) (16) 111 108 82 80 76



60 58 36 24 14 12 10 8 6 4



一 春の光

みなさんは、いよいよ小学校最後の学年である六年生の春をむかえましたね。かがやかしい春の光がみなさんにふりそそいでいます。みなさんの将来に、期待するように、祝福するように、春の光がふりそそいでいるように思われます。おだやかに、やさしく、あたたかく、明かるい希望の多い春です。

六年生の「国語」は、この「春の光」に始まって、読む、聞く、話す、書く、「ことば」の学習に役立つさまざまな文のすがたがくりひろげられます。詩、物語、伝記、感想、シナリオ、研究発表いずれも国語の学習に欠くことのできない重要な材料ばかりであります。しかも、おもしろく学習ができるように心をこめて配列してあります。これを生かして使つて、国語のはたらきを身につけるのは、みなさんの役目です。

まず最初は詩の勉強です。「日光」では、よろこびにあふれる春の自然をうたい、「ぼくのかいたおかあさんの顔」では、母への愛情のすなおな表現を示し、「母の日」では、春の光のようにやさしいおかあさんへの感謝の心を表わしています。どれもみなさんの生活に身ぢかな詩であります。それらがどんなふうになどんな「ことば」で表わされているか、注意深く読んでみましょう。

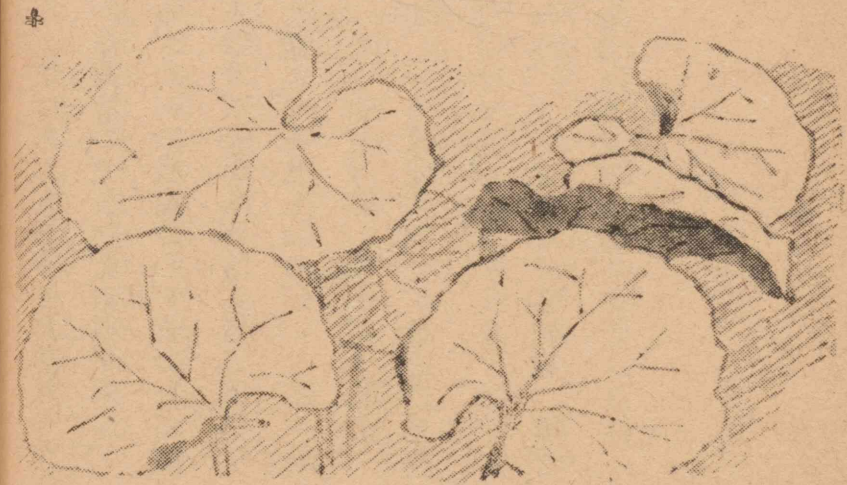
(1)の詩は、七音五音の調子をもとにした形の整ったものですが、(2)、(3)の詩は、形にとらわれない自由な調子をもとにしています。一方は定型律で、他方は自由律です。声をだして読んでみると、そのことはよくわかります。

詩の心がよく表われるように朗読してみましょう。よい朗読をするには、まず、一字一句に細かい注意をしながら、味わつて読むことが必要です。

(一) 日光

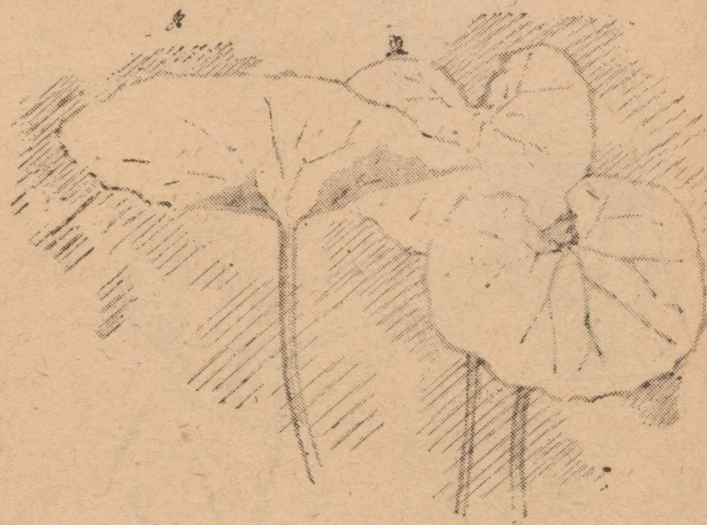
お庭のすみのフキの葉に
光がいっぱい満ちています。
ふちは金いろ、日の光。

ブンブン小バチがきてとまる。
すると、その葉がすぐゆれる。
光が、ちらちらこぼれます。



下にもまあるい葉がひとつ
その葉に光がこぼれます。
その葉もゆれます、光ります。

いつも光は満ちています。
空にいっぱい満ちています。
お庭にいっぱい満ちています。



(きたはら・はくしゅうによる)

(二) ぼくのかいたおかあさんの顔

これ、

ぼくのかいた絵だよ。

おかあさんの顔だよ。

ずいぶん目が大きいなあって、

そう、この目でいつも、

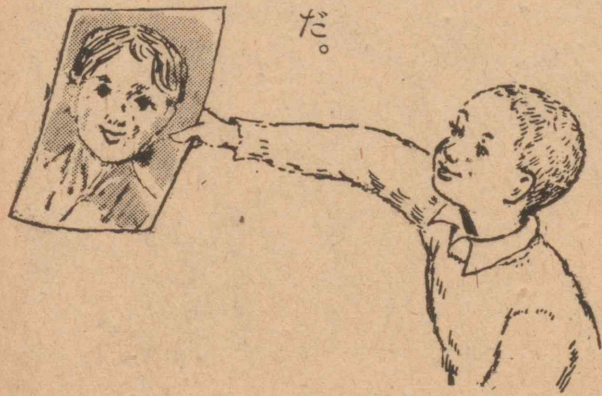
ぼくのすること、じっと見ててくれるんだ。

耳も大きすぎるって、

そうかなあ、

この耳、ぼくの言うこと、なんて

も聞いてくれるんだよ。



だけどわがままは

きこえませんよだって、

この鼻、ぼくに似てるだろう。

それから口も。

ぼく、人に言われるんだよ、

あなたはおかあさんそっくりねって。

ぼく、心も似てるよいいんだがなっ

ていつも思ってるんだよ。



ぼくは、おかあさんがいちばんすきなんだ。
この絵、いっしょうけんめいにかいたんだよ。

(ながさき・げんのすけ による)

(三) 母の日

明かるい五月の朝

きょうは 母の日とわたしが言いました。

そうだ 母に感謝する日だと

弟が言いました。

感謝つてなあにと

妹は すましてなわとびをしていました。

おやつは みんなで庭でいただきました。

明かるい光の中でカーネーションの赤を

おかあさんのえりにさしてあげました。

少ししめった花びらに

光が てりかえしてゆれながら

おかあさんの ほおにうつりました。

まあ 美しいおかあさん。

おねえさまはお台所

わたしはおそうじ 妹はおつかい

みんなでおてつたいをいたしましたら

いつも母の日ならよろしいのにと

おかあさんが おわらいになりました。

光の中のおかあさん

おかあさん いつまでもお元気でいてください。



二 お話二つ

これはお話をするような書きぶり（説話体）で書かれた「少年のクラブ」「けむりのゆくえ」という二つの文章です。

(一)は、現在二十五万人の会員を持つといわれるアメリカの少年のクラブの起こりと、アメリカの少年たちの生活のようすについて述べたものです。

(二)は、物が燃える時に出るけむりが、どんな運命をたどるものであるかということを順序よく書いたものです。前者を社会的なお話というなら、後者は科学的な内



容のお話であると言えましょう。

みなさんも研究発表会、記念日、学校放送などで、たびたびお話を聞く機会があるでしょう。そうした機会には、お話を聞きつつ放しにしないで、要点やすじをメモしたり、感想を述べあつたりしましょう。それがどれだけあなたたちの知識を確かにしたり考えを深めたりするかわかりません。

この二つのお話は、やはり右のようなねらいで出したものです。だからこの課では、よく読んで要点を記録したり、あらすじをお話してみたり、感想を発表しあつたりすることが、学習の大きなめあてです。



(一) 少年のクラブ

きょうは、ゆ快にのびのびと毎日をすごしているアメリカの友だちのことをお話しましょう。

アメリカの少年たちは、自分たちだけのクラブをもっています。アメリカ国内の大小とりどり二百四十の町々に少年のクラブがあるのです。町に住んでいる少年なら、八才から二十才までの子供はだれでもこのクラブにはいることができます。そしてクラブのいろいろの設備を利用することができるとです。体操場もあれば読書室も集会所もあります。水泳のプールや木で細工をして遊ぶところもあり、音楽や劇で楽しむこともでき

ば、お風呂やシャワー（水浴び）のそなえもあります。

そのうえ、会員をいなかへおくつで、二週間ずつ楽しい夏のテント生活をさせることもあれば、必要な場あいは、お医者さんがからだの検査をしたり、歯を直したりするし、年上のものには職業のめんどろをみたりもいたします。

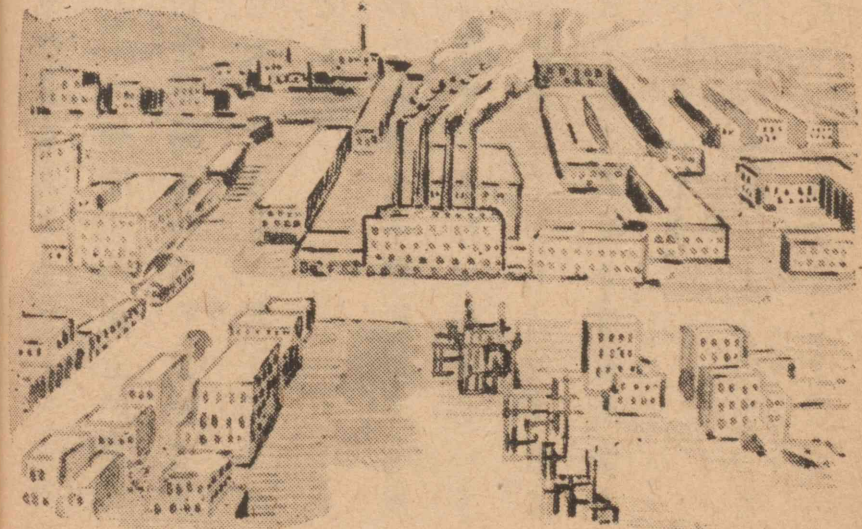
このクラブは、いまから九十年前の千八百六十年につくられました。そして会員がはらうわずかな会費、それに何千という感謝の心でいっぱいのおとうさん、おかあさんからよせられる寄付金、広く公共のためにつくそうと考える人々や市役所からおくられた寄付金や設備など、いじされています。

では、どうしてこんな少年のクラブが作られるようになったのでしょうか。ちょうど、クラブが初めて作られようとするころ、

めざましい産業の発達で東部アメリカの小さな村々がみるまに大きな都会になって、いろいろの工場が、はとばや広い川の兩岸に立ちならぶかと思つと、空高くそびえるえんとつのみわりのあき地には、あとからあとからおうちが建つていきました。

新しい町へ、新しい都会へ――

職業を求めて、いなかや遠いよその国から、どしどし集まつて来た何百万という人々、その人々はせまい道すじにぎつしりとつまつた、すすで



よごれたおうちに住まねばなりません。そのころは、今のように、教育もゆきとどかず、生活ぶりもよくなかつた人々のことですから、何千という子供がひどいびんぼうらしのうちに大きくなっていくわけです。子供たちは生徒数ばかりむやみに多い学校にかよつていましたが、遊び場といつては、道ばたや路地、それにごみのまきちらかされたあき地しかないといふしまつてありました。

けれども、ニューイングランドの紡績工場に働く何人かの人々のなかには、「このようなみじめなありさまでは、元氣と冒険心と思つうように發揮できない少年たちの群のなかから、かならずよくない子供が出てくるにちがいない。」と考えるものがありました。その人たちが考えた末、じぶんたちの町から悪いこ

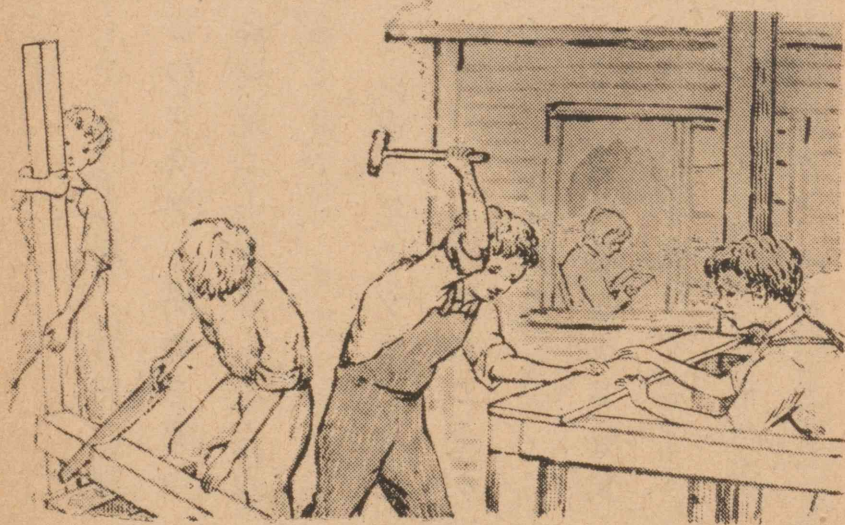
とをする少年が出ないようにと、初めて少年のクラブが作られることになったのです。

こうして、おとなの人々の考えからできたクラブであります。が、何といてもいちばん大きな力となったのは、「みんな集まって遊ぶところが欲しい」という子供たちの心からの願いがこのクラブをうみだしたものと云えましょう。

ですから、初めのうちは、たいていふだん使われていない工場とか店さきで開かれたものでした。そこで子供たちは、ゲームごとや読書、木工などするぐらいがせきの山でしたが、今まで遊び場を持たなかった少年たちがこうして自由に遊んだり、友だちのグループをえらぶことができるようになったので、非常な人気をよぶことになりました。

そこでおとなの人やにいきんたらが進んでクラブの指導を申し出るやら、寄付金がふえるやらで、会員もどんどんと多くなってくるありさまでした。

こうして、クラブが作られた町々では、罪を犯したり、事件を起こしたりする少年が目に見えて減ってきました。またしたので、これに気のついたアメリカの西部や南部の町々でもクラブを作ることを考え始め、やがてまもなくアメリカの国中、いたるところ



にクラブが組織されるようになったのです。

そうしてクラブの仕事もたえず手広くひろげられ、特別に訓練された人たちがクラブにやとわれ、どのクラブも建物を買ったり建てたりするようになって、今では総数二十五万人からの少年がクラブの会員になっているのであります。

その後千九百六年になって各地ばらばらの少年のクラブは国営の「アメリカ少年クラブ法人組織団」という名で横につながれて、その本部をニューヨークに置くことにしました。

本部は各地の少年クラブのために進んでいろいろな役目をすることになりましたが、地方のクラブの自治権を制限するようなどとはなく、主として経験のある人が幹部になって、地方クラブの営み方について、いろいろ指導するにとどめていきます。

また本部からは各クラブに配る印刷物や、また指導者に読んでももらうために特別のパンフレットや教科書なども発行しています。そして国の政治や国民の生活をよくすること、あるいは、めいめいの商売のこと、世の中の組み立てなどを説明する一方、少年たちや地方クラブがやりたいと思う仕事にまで手をかして助けることもします。

どのクラブの指導者もそうですが、その人たちは、少年たちの協同の精神とかスポーツマン・シップ、正直、清潔など、人間としてそなえていなければならぬけだかい精神をうえつけようとする希望にもえているのです。

そしてクラブのやる仕事はすべてこういう精神をめざして考えられていますけれども、ことさら少年たちにこうしろ、ああ



しろということはず、しらすし
らずのうちに少年たちにつばな
性質がそなわるように努力してい
るわけです。

クラブのおもな目的からみると、
こうしたしつけはほんとうにえだ
葉の問題で、たいせつなことは少
年に遊ぶ時間や場所をあたえるこ
とにあるのです。

だから、どの少年たちにも、き
められたプログラムにかならず加
わらねばならぬという規則はあり

ません。

ただ、子供たちは、さわぐことのすきなために、自然に遊び
ごとにひきこまれることになり、ものを作り出そうという心が
自然に絵や工作や建築などへ向けられていくことにもなります。
そして一方ではクラブはよいものだ、友だちなかまに加わつ
て、楽しく遊ぼうという気持を自然に起こさせるのであります。
このように、アメリカの少年クラブの子供たちは、おおぜい
の友だちとゆ快地に遊び、そうしてじぶんでは少しも気づかない
うちに、ほかの人々といっしょに楽しく生活することを覚えて
いくのです。

(二) けむりのゆくえ

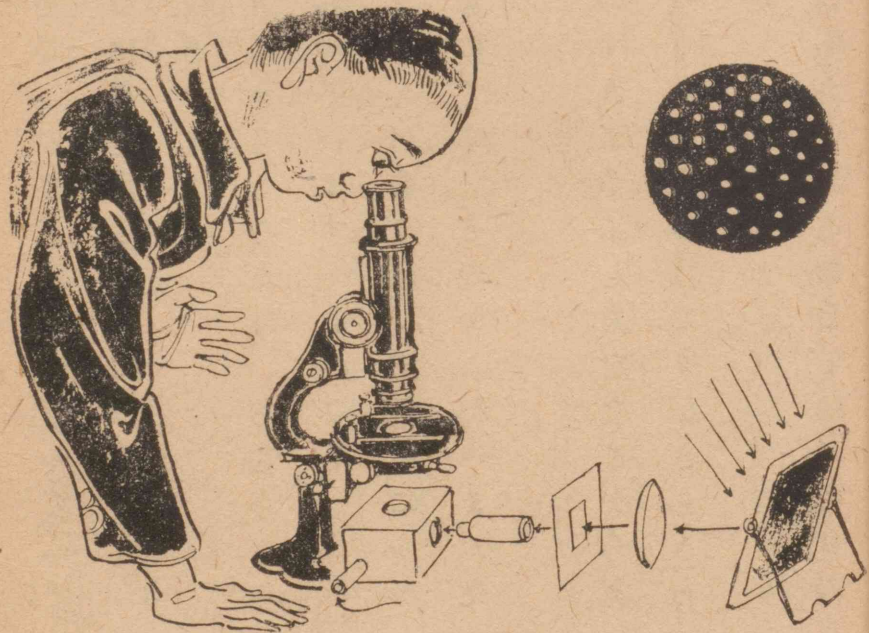
えんとつから出るけむり、たき火のけむり、たばこのけむり、おせんこうのけむりなど、ものが燃える時に出てくるけむりは、見ていると、上の方に立ちのぼって、どこかへ消えていってしまします。よく人が「けむりのように消える」ということばを使いますが、いったい、けむりは、どこへいってしまうのでしょうか。

まず、けむりの正体を調べてみましょう。そのためけんび鏡で、けむりをのぞいてみましょう。

図に示したように、けんび鏡の対物レンズの下に、上の方と

横の方にガラスまどのついた小さなはこを置きます。このはこの横の方に入口をつけ、そこからたばこのけむりを中にに入れてすぐ入口をとじます。

そして図のように水平に、日光か、強い電燈の光で照らします。この時、光線のとちゆうにレンズを入れて、光が、はこの中に集まるようにします。すると、けむりの中を光が通っていく道が見えてきます。そこで、



けんび鏡で上からこの光のあたっているところをのぞいてみますと、どうでしょう。まるで夜空に星を見るように、きらきらかがやいた点が、いっぱい見えてきます。

しかも、星とちがって、このきらきらした点は、あちらこちらと生きものののように、動きまわっています。これこそ、けむりの正体にほかなりません。つまり、けむりは、空気中にうかんでいる小さなつぶの集まったものです。そのつぶがいま、光で横から照らし出されたのです。

わたしたちは、日光が、雨戸のすきまやふしあななどから室の中にさしこむ時に、その光の通り道にあるほこりがきらきらかがやいて、はっきり目にうつることをよく知っています。いまの実験はこれと同じ理くつで、わたしたちの目ではけむりの

つぶが見えないので、けんび鏡を使って見たわけです。けむりも、ほこりも、空気中に小さなつぶが、うようよ集まったものであることにはかわりがありません。

学者の調べたところによりますと、ほこりは、仮にまるい球だとして、直径が一ミリメートルの千分の一くらいですが、たばこのけむりですと、つぶの直径はさらにその十分の一くらい、つまり一ミリメートルの一万分の一くらいの大きさしかありません。こんな小さなものでも、電子けんび鏡という特別なけんび鏡で見ますと、その大きさや形がはっきりわかります。

けむりのつぶは固体のことも液体のこともあります。汽車や工場のえんとつから出る黒いけむりは、たいてい炭のような固体のつぶが集まったものです。たばこやおせんこうのけむりの

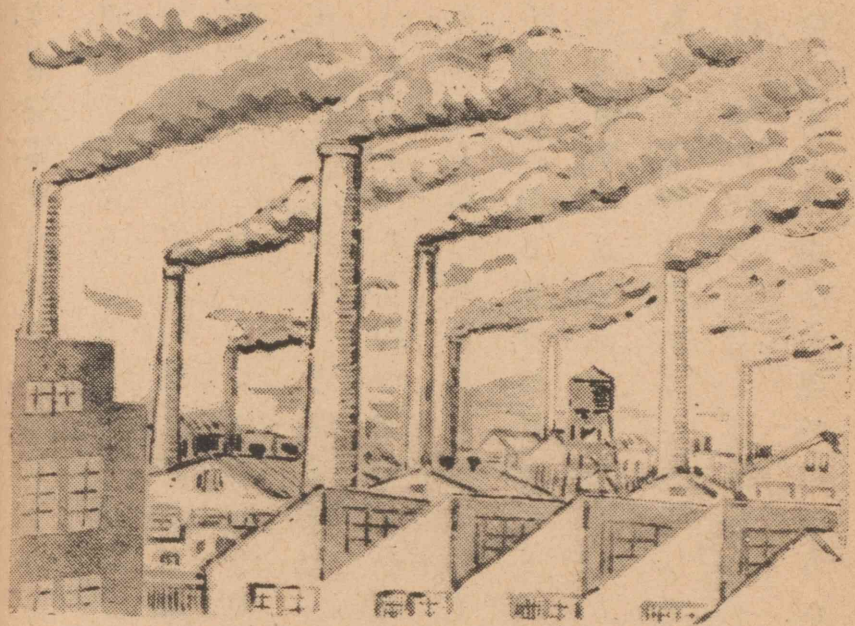
つぶは、やにと水からできています。お湯の上から立ちのぼる白いゆげは、けむりとはよびませんが、空気中に水の小さなつぶが集まっつてうかんているものですから、やはり、けむりのなかまと言えましょう。

けむりが、空気中にうかぶ、固体または液体の小さなつぶの集まりであることはわかりましたが、それが空に向かってのぼっていくうちに消えてしまうのは、なぜでしょうか。それはつぶがなくなってしまうからではありません。つぶが広いところに出たために、ばらばらに散らばってしまうからです。ちようど池にインキを一てきたらすと池の水の中にインキがひろまっつていって、やがてうすくなって見えなくなるのと同じです。

ところが、お湯の上に立つゆげは、前に述べたように水の小さなつぶからできていますが、これが消えていくのは、ほんとうにつぶがなくなるからです。水の小さなつぶは、きわめてじよう発しやすく、じきに水じよう気という気体になってしまうのです。しかしふつうけむりといわれているものでは、つぶがじよう発してなくなることには、めったにありません。

さて、けむりのつぶが、ひとたび空気中にばらまかれますとそれから風に乗って、はて知らぬ空の旅へのぼっていきます。ではそれからさきはどのようなのでしょうか。

空気中にまいあがつたけむりのつぶの中で大きなものは、とちゆうで何かとぶつかって、そこについてしまったり、あるいは、地面に落ちてしまいます。工場のたくさんある町では、いっつもえんとつから黒いけむりがはき出ているため、町ぜんたい



がなんとなく、すすけて黒っぽい感じがするのもそのせいです。こういう所に住んでいる人たちはいつも、きたない空気をすっているために、けむりのつぶがからだの中にはいつて悪い病気にかかることがよくあります。けむりのつぶの中で、ごく小さなものは、なかなか地面に落ちないで、いつまでも空気中に漂っています。そして、それはしばしば、きりとなって現われ

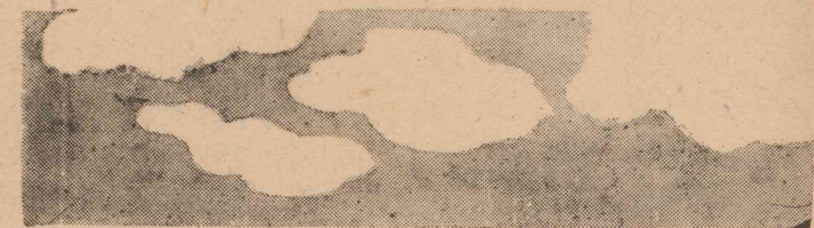
てきます。

雲や、きりも、空気中に小さな水の子ぶが集まって漂っているものです。それで、これらも、けむりのなかまみたいなものです。ただ、つぶの大きさは、たばこのけむりやおせんこうのけむりなどとちがって、はるかに大きく、雲の子ぶは一ミリメートルの百分の一くらい、きりですと、それより少し大きいくらいです。もともと、雲もきりも同じもので、地面の近くにかかるものを特にきりといっているのです。

雲やきりは空気中の水じょう気が、小さな水の子ぶの集まりに変わったものですが、この水の子ぶができる時に、かならず何かつぶの「しん」になるものが必要なのです。その「しん」がないと、いくら水じょう気がたくさんあっても、雲やきりは

できません。けむりのつぶの中で特に小さなものは、この「しん」になります。つまり、けむりのつぶのまわりに水じょう気が集まって、小さな水のしじくができる、これが雲やきりになるのです。

けむりのたくさん出る都会地、たとえば、戦前の大阪や東京のようなどころにかかるきりは、こうしてできるものです。イギリスの首都ロンドンは、きりの都といわれるくらいに秋から冬にかけて、しばしば、こいきりに包まれます。これは、あちこちのえんとつから出るたくさんけむりが「しん」となったりきりができるからです。こういうきりのつぶを集めて、それから水をじょう発させます。あとにはかならず、何かえんとつから出てきたようなものが残ります。



都会のきりは、よくこうしてできるものですが、それでは田園のきりや空にうかぶ白雲のつぶの「しん」は何でしょうか。学者たちは、これは海の塩が、「しん」になるのだといっています。海の水が波となつてくだけ散る時に、海水の細かいしじくがとび散ります。これが風に乗って空高くまいあがるうちに、すっかりかわいて、塩のつぶとなつて空中にうかびます。そこ



へ水じょう気がたくさんくると、塩のつぶは、また水をすって小さな水つぶとなり、雲やきりになるというわけです。もしそれがほんとうなら、そのような雲の水を集めてみると、その中に塩がとけこんでいるはずです。

今から二十年以上も前に、ヨーロッパの学者たちはこのことをしきりに調べていました。特にケーラーという学者はヨーロッパの北の方にあるスエーデンやノールウェーという寒い国の山の上に、十年以上もたてこもって研究を続け、その結果雲やきりの水を集めると必ずその中には、わずかながらも塩がはいっていることを明きらかにしました。この塩は、元は海水のしぶきからきたものにちがいありません。

雲のつぶが何かの理由で大きくなると、重くなつて、下へ落

ち始めます。これが雨です。この雨つぶが空気中を落ちていくうちに、けむりのつぶをさらつていっしょに地面に落ちてしま

います。
わたしたちは、いま、物が燃える時に出るけむりが、どんな運命をたどるものかということを知りました、細かいことをいうと、まだまだこれからも、よく研究してみないとつきりわからないことがたくさんあります。しかし、けむりについてこれだけのことがわかるまでにも、世界中の学者たちはおたがいに力を合わせあつて、長い間努力をし続けてきたのです。



三 博愛の天使

これはナイチンゲールの伝記です。よく読んでナイチンゲールの一生をじっくりと味わってみましょう。

ナイチンゲールは少女のころから、わたしたちのいちばんたいせつな問題である「しあわせ」ということについてしんげんに考えた人です。何がいったい人生の幸福なのでしょう。みなさんもこのことについて、めいめいで考えたり文に書いたりしてごらん下さい。また友だちや先生と話しあつてごらん下さい。

よい伝記は人の心を奮い立たせるものです。偉くなつた人の中には、少年時代に伝記を読んで発奮した人が少なくありません。わたしたちもこれを機会に、人類の幸福と進歩につくしたすぐれた人々の伝記を読んでみましょう。きつと心にくいこむようなかずかずのことばにぶつかると思います。よいことはノートに

書きつけておいてときどき読みかえしましょう。また心に深く残つた伝記を、おたがいに発表しあうこともよい勉強です。こういう仕事の中にわたしたちが大きく深くのびていくきっかけが豊かにふくまれていることをわすれてはなりません。

遠くには、はい色の岩の多いすばらしい山がく地帯がそびえ、近くには水清いダーウエンド川が流れているひろびろとした緑の牧場、その中ほどに、十字の形をした古風なりっぱな大てい

たくが美しい木立に囲まれていました。

うらには広い庭園があつて、長く続くなみ木道には春から秋にかけて、色さまざまな花がさき、小鳥がさえずつていて、まるで天国のような美しさです。このなみ木道こそ、お



さないフロレンスのいちばんお気に入りの遊び場所でした。おねえさんのパーセノープや、おかあさんといっしょに散歩するのも楽しかったが、それよりなみ木道の林には、とてもたくさんのおねえさんが住んでいて、えだからえだへとびまわったり、小さなかわいい茶色の目で、通る人を見おろしたりしているのです。

「リスちゃん、今日は。」

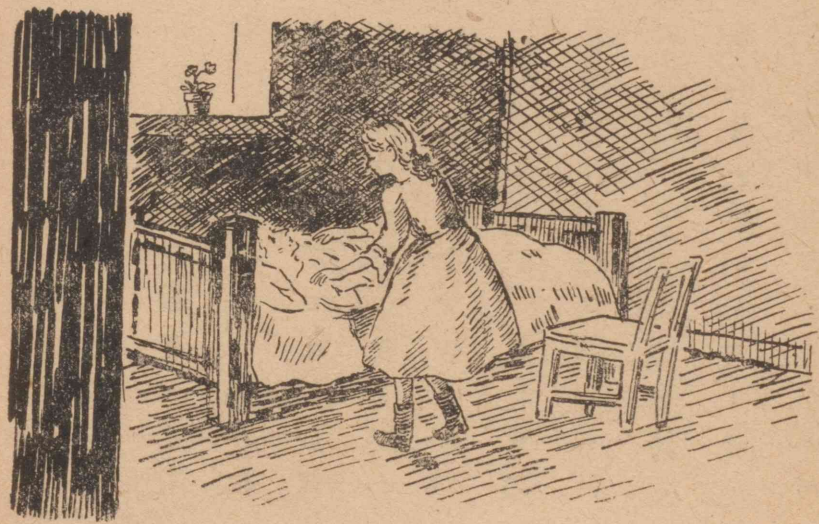
フロレンスは、いつもこう話しかけました。フロレンスのきれいな着物のポケットには、リスの大すきなクルミがいっぱいはいって、ふくらんでいました。リスたちはそれをちゃんど知っていて、われさきにとフロレンスの足もとにころびながら、かけよってくるのでした。

「あれ、あれ、リスちゃん、そんなにさわがなくてもいいのよ。」小さいおじょうさんは、わらいながら、群らがるリスたちのまんなかに、クルミを落としてやり、リスたちがそれを取りっこして、争ったり、いろいろこっけいなしぐさをするのを、いかにも楽しそうに見とれているのでした。こうして、フロレンスとリスたちは、とてもなかのよいお友だちになっていました。フロレンスは、このなみ木道を、ときには小ウマや、ロバに乗って散歩に出かけることがありました。そして、屋しきのみまわりにある貧しい人たちの住んでいる所をたずねて行って、そういう人たちと話をするのが楽しみでした。ことに病気をしている人があるのを聞くと、なんべんもたずねて行って、やさしくなぐさめてやるのでした。

「どう？ 病気はよくなりました？」
やさしい声でその家へはいつてい
くフロレンスのすがたを見ると、
年よりたちはなみだをうかべて喜ぶ
のでした。

「ありがとうございます。おじよう
さん。……おじようさんのやさし
いおことばを聞きますとからだが
きゆうに楽になりますよ。」

「何か欲しい物は無いこと？ おば
あさんは、もつとおいしい物をた
べなくてははいけませんわ。」



フロレンスのおかあさんは、たいへんあわれみ深い人で近
所の人たちに、物をあげることを楽しみにしていましたが、フ
ロレンスはいつもそれを届ける役になって、食物や着るもの
をロバに積んで持って行ってやりました。だからフロレンス
は、リスたちから歓迎いされたように、どんな人からもとても
喜ばれました。

フロレンス・ナイチンゲールのおとうさんは、イギリスで
も有名な家がらに生まれ、ハンプシャー州のエムプリー・パーク
や、デルビシャイ州のリイ・ハーストに広い大きな土地を持ち、
たいそうなお金持で、家もすばらしいのが三か所にありました。
夏の間はリイ・ハーストの屋しきで、春と秋はエムプリーの屋

しきに、それから冬の社交季節がくるとロンドンのカーフェアの屋しきにというふうには、一年じゆう、どうすれば楽しくくらせるかということばかりを考えて、この上もないぜいたくなくらし方をしていました。おとうさんはそれに旅行がとても好きでたびたびヨーロッパ大陸を遊びまわりました。フロレンスは、千八百二十年の五月十二日に両親がイタリアの美しい都フロレンスにたい在中に生まれたので、その都の名をとって、フロレンス・ナイチンゲールと名づけられたのでした。

そんなわけで、フロレンスは、一年の大部分は、いなかのひろびろとした屋しきで、美しい自然やいなかの人たちに親しんでくらし、社交季節がくると、ロンドンの上流社会のはなやかな世界の中で、何一つ望みのかなえられないことのない、ま

るで王女さまのように豊かな生活をしていました。

そのころ、イギリスの上流家庭では、子供たちを学校に通わせないで、家庭教師の手で教育する習慣でしたので、ねえさんのパーセノープもフロレンスも屋しきの中で勉強をしました。

おとうさんは、教養の深い人で、フロレンスキょうだいの教育にも、進んだ考えを持っていました。ですから家庭教師に任せきりにしないで、じぶんでちゃんと方しんをきめました。

フロレンスは、まだ七・八才のころから、手芸・音楽・文法・作文などを教えられ、だんだん成長するにつれてフランス語、ドイツ語、イタリア語、ラテン語、ギリシャ語、憲法史、数学、心理学、それからイギリス、ドイツ、ローマ、イタリア、トルコ等の歴史など、それはたいへんな勉強をつぎつぎとさせられ



ました。ところがフロレンスは、小さい時から、きちょうめんなことが大すきで、どんなことでもいいかげんなことをするのが大きらい。本を読んでもいいかげんな読み方はせず、たいせつなところには印をつけたり、書きぬきをしたりして、じゅうぶんわかるまで読むのでした。

こうしてフロレンスは十七才になった時、家の中でできるだけの教育はひととおり済ませましたので、その教育の仕上げという意味で、両

親がつきそって外国旅行に出かけました。

ナイチンゲール一家は、フランス、イタリア、スイスの国々をまわりましたが、パリには一年以上もどまって、毎日のように有名な音楽会や、ぶとう会に出かけて、フランスの第一流の政治家や芸術家や学者などと知りあいになりました。

ふつうの少女なら、そういうじぶんをこの上もない幸福に思つて楽しく明かるく、何一つ心配なく毎日をすごすのですが、フロレンスは全く反対でした。かの女はせいが高くて、やなぎのように細いからだをしていましたが、はい色の目はいつもさびしさをたたえてふし目がちでした。歯が非常に美しいので、にっこりわらう時には、いいよりのない愛らしさを持っていて、はなやかな社交界ではだれからも愛されていましたが、はたか

らもてはやされればされるほど、かの女の目つきはいつもさびしそうにくもってくるのでした。

「どうしたのでしょね。フロ

ーさんは？」

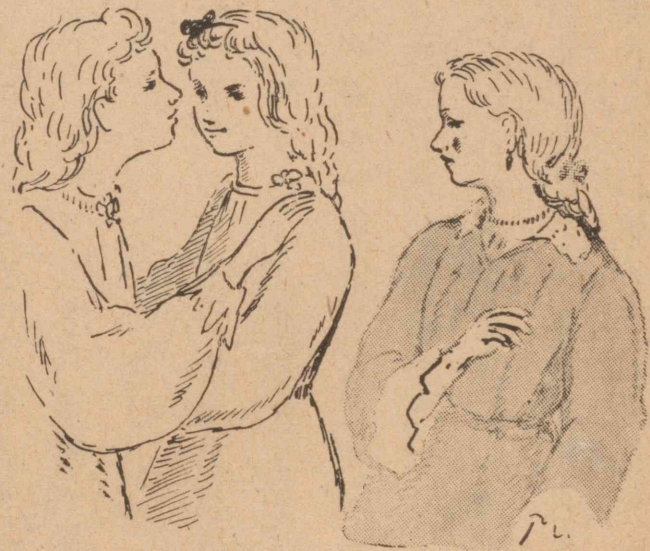
「よほど変わり者らしいですよ。

こんなうわさを、だれからも言われるようになっていました。

フローレンスが、一家の者と

イギリスのエムプリーの屋しき

に帰って来た時は、もう十九才になっていました。ある夜フローレンスは、お客に来たなかのよいお友だちといっしょに庭を



散歩していましたが、とつぜん、じぶんの家のまどまどに明かるいひがともっているのを見ると、

「まあ、なんてきれいでしよう。まるで、きりの中にうかんだ大きいお船のようじゃありませんか。」

「ほんとにね。」

「この家を病院にしたらどんなにいいでしょうね。ずいぶんたくさんの病人がはいれますわ。そしてわたしが看護婦になって、あちらこちらせわしく歩きまわるのよ。なんてすてきでしょう。」

「まあ、あなたは、変わってるのね。」

友だちをびっくりさせましたが、フローレンスはほんとうにそう思ったのでした。

「わたしは、そんなに変わってるのかしら？」

フロレンスはじぶんのことを反省してみるのでした。しかし、かの女は、どういうものか五つ六つのころからなにも仕事をしないてただ遊びくらしている人の中にまじっていると、とてもさびしくなるくせがありました。そのかわり、いろんな人たちがいっしょうけんめいに働いているのを見ると、とても楽しくなり、そういう人たちとさまざまな話をするのが、なによりすきでした。

「わたしは働きたい、なにか仕事をしたい。なんでもいい、人のためになる仕事に全力でぶつかっていききたい。」

フロレンスは、いつも心の中で、こう考えていました。すると食しい人たちが病気になって苦しんでいるすがたが、フロ

レンスの目さきにうかんでくるのでした。

「そうだ。わたしは看護婦になりたい。どうしても看護婦になりたいのだ！」

フロレンスは小さい時から、こういうゆめと、願いを持ち続けてきたのでした。そしてそれが両親から許されそうもないので、いつも落ちつけなく、さびしくなってくるのでした。

「おかあさん、お願いがあるのですけど。」

ある夜フロレンスは、おかあさんに思いきって言いました。「なんなの？」

「ね、お願いですから、わたし四・五か月ぐらいおいとまをいただきますいのよ。ソールス・ベリーの病院には行って、看護



法を習いたいと思えますので。

「なんですって！ フローレンス。びっくりさせるものではありませんよ。」

「いいえ、おかあさん、わたしほんとうなのよ。どうぞわたしを看護婦にさせてくださいませ。」

おかあさんはびっくりして、もう口がきけなくなりました。そのころのイギリスの豊かな家庭では、看護婦になる人などひとりもなかったのです。その看護婦にフローレンスが

なりたいと言ひ出したのですから、おかあさんのおどろきも、もつともでした。

「フロー、看護婦なんて仕事は、あなたのできることはありませんよ。」

「いいえ、おかあさん、世の中には病人がとても多いのに、しんせつにさすってくれる人や、やさしいことばをかけてくれる人もなしに、苦しみがらさびしく死んでいく人がたくさんおりますわ。そういう人がわたしをよんでいるのですもの。わたしはこの家にも、少しもしあわせになれないのです。」

おかあさんの顔はまっさおに変わりました。フローレンスは、おかあさんをこれ以上苦しませることがお気の毒になってだまってしまうました。しかし、フローレンスの心の中で燃えるよ

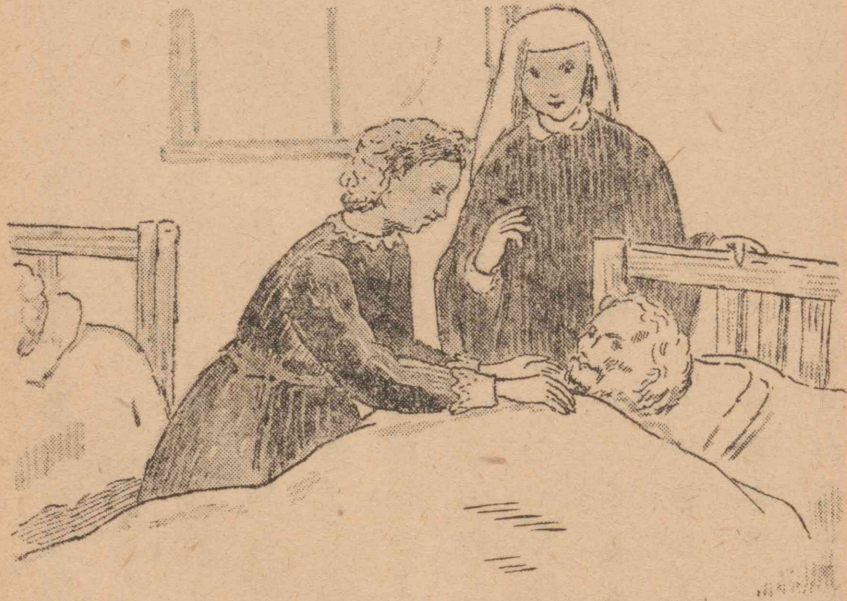
うな願いは、その後、いよいよ大きくひろがってきました。それなのにかの女のまわりには、ダンスとか芝居とかの遊びがいっつもついていて、フロレンスを苦しめ続けました。フロレンスはとうとうだれの目にも病人のように元気がなくなりました。

そこで両親は、千八百四十七年の秋に、フロレンスを連れてローマに旅行しました。その旅先でも、はなやかな日が続きました。しかし、かの女の心をいちばんひいたものは、ローマにあるトリニタ・ド・モンテイ寺のあまさんがやっている女学校と孤児院でした。

フロレンスは、その人たちと親しくなつて、十日ばかりあま寺に住みこんで、その制度や仕事などをよく調べました。

千八百四十九年の秋、フロレンスは三度目の外国旅行に出かけて、エジプトとギリシャをまわつて、帰りにドイツに寄つて、あくる年の七月三十一日にはライン川のほとりにあるカイゼルスベルトに着きました。

カイゼルスベルト！ それはフロレンスが長い間あこがれていた世界的に有名な博愛事業団のあるところでした。フロレンスは、そこでフリードナー



牧師や、多くの看護婦たちといっしょに生活して、あわれな病人たちの看護につとめました。

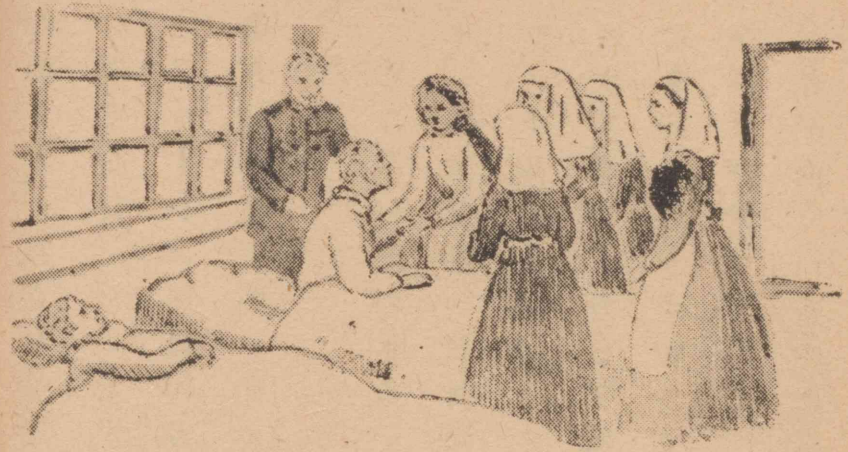
「もう、何ものも二度とわたしを、苦しめることはあるまい。」

二週間ほどたい在したフロレンスは、勇気にみちみちた、すがすがしい気持で、久しぶりに両親のもとに帰って来ました。その後も、フロレンスを苦しめるはなやかな生活が続きました。おおかあさんも、どうとうフロレンスの熱心に打ち負かされて、ついにカイゼルスベルトで看護術を習うことを許してくれました。そして三か月の修業をおえて帰ってくると、おとうさんとメイおばさんがフロレンスの心をよく理解してくれました。かの女に結こんさせる望みをすてて、博愛事業に一身を任せることを許してくれました。フロレンスが三十才

の時です。おさないフローちゃんの望みが、ようやく達せられたのでした。

フロレンスはパリに出かけて、市病院や保養院に入所して働き始めました。千八百五十三年のことです。

ところがその年の十月に、まずロシアとトルコに戦争が起り、あくる年の三月には、フランスがイギリスと連合軍をつくり、トルコを助けるためにクリミア半島に兵を出しました。これが有名なクリミア戦争です。はげしい戦いが続いて、敵味方とも死しう者がたくさん出てきました。ことにイギリス軍の損害は非常なもので、そこへ流行病まで起きてたくさんのごせい者が出ているのに、病院の設備もなく看護婦もいなかっ



で、それはみじめなことになりました。それを知ったフロレンスはいろいろな反対をおし切り、政府を説きつけて看護隊をつくり、じぶんのお金をつぎこんで戦線へ出かけていきました。それまで戦争には女の看護隊など無かっただけに、初めはばかにしていた兵隊も、フロレンスのあたたかい博愛心と熱心なやさしい看護を受け、非常に喜び、感謝し尊敬してきだしました。

クリミア戦争は幸い連合軍の勝利に終り、フロレンスの名はたちまち全世界

にひろまりました。しかしフロレンスの願いは、戦争に勝つことなどでなく、この世のやめる人たちをあたたかい心で看護するということであつたので、戦争が終つてからもいよいよ熱心に、看護婦学校をつくつて多くの看護婦の養成に努めたり、その外いろいろな博愛事業に従事して多くのかがやかしい愛の事業を残しました。そしてこの世界的な博愛家のフロレンス・ナイチンゲールは千九百十年（明治四十三年）九十才でなくなりました。故きように近いエロウ墓地に父母といっしょにほうむられておりますが、四角の大理石のお墓には、かの女のかしら文字である「F・N」の二字と生年月日だけしるされてあるのも、いかにもその一生にふさわしいようです。

（すわ・さぶらうによる）

四 登山

この課は、登山というテーマで、「ピッケルの思い出」というずい筆ふうの文章と、「山へ登ろう」という詩をとりあげています。

「ピッケルの思い出」の作者、まき・ありつねさんは、世界的登山家として有名な方です。まきさんのこの文章を読めば、だれでも、今まで想像していた以上の、広いしかも深い「登山の世界」を知ることができるとでしょう。これをきっかけとして、もつともつと登山についての文を読んでみようではありませんか。

みなさんの中にも、山に登った経験をもった人があるでしょう。山でなくても、遠足はたびたびやっていますね。そうした登山や遠足にまつわる、わすれられない思い出の一つや二つは、だれでも持っているでしょう。その思い出を語る会を開いてみるのもよい勉強です。できればそれを、ずい筆ふうの文章に書いてみま

しょう。

「山へ登ろう」という詩は、むらの・しろうさんというおとなの詩人が作ったものですが、まるであなたたちが、元気に山登りしているような感じの詩ですね。よく読んで、この詩のたのしさを味わいましょう。そして「山へ登ろう」ということばが、あなたたちの心からのよび声になってほしいと思います。

ここへは、登山をすればどんないいことがあるかといったような説明はしません。でも、この詩には、おのずからその答がうたわれているように思います。

登山や遠足をするためには計画を立てなくてはなりません。のちのちのために記録をとっておくこともたいせつなことです。それに、スケッチとか、詩、ずい筆などを加えると、そこにおもしろい一つのまとまりができます。これに「わたしの登山記」とか、「わたしの足あと」とか、いい名まえを考えて、楽しい思い出の記録を作りましょう。



ですから、年中雪と氷におおわれていて、その雪や氷が谷に落ち積もって氷河をつくっています。ですからこの登山には、ピツケルはどうしてもなくてはならないつえであるとともに、よいピツケルの本場でもあります。

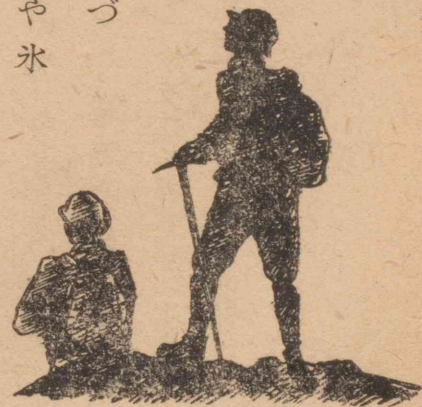
スポーツとしての登山は、千七百八十七年にジュネーブの博物学者であるドリシユールという人が、アルプスの中でいちばん高いモン・ブラン（四八一〇メートル）に、初めて、登った時に始まると、ふつう言われていますが、この時の

(一) ピツケルの思い出

登山も、ただ夏だけに限らず、雪のある

季節にも行くことになりますと、こんごうづえでは用が足りなくなりますが、こおった雪や氷のしゃ面を登る時に、からだをささえたり、雪のしゃ面に足場を作ったりするような場あい、ピツケルはどうしても欠くことのできないつえとなります。ピツケルは、きたえあげた鉄のつるはしと、するどい石づきをもった、ちようど散歩用のステツキぐらいの長さのものです。

スイスのアルプスでは、夏でも高いみねは雪線の上にあるの



登山には、まだピツケルは使われておりません。ただ氷河には、深いき険なわれ目がありますので、これに落ちこまぬように、長いつえを持って登っています。このわれ目の上を、雪がおおっている、うっかりしてふみ破って落ちこむのです。その時に、長いつえが橋わたしになって、からだをささえるといふ考えだつたのです。

このド・リシユールという学者が、モン・ブランに初めていたゞきまで登つたことは、ヨーロッパ各地に大きなしげきをあたえ、これからつぎつぎと、まだだれも登つたことのないアルプスのみねをめざして人々が集まりました。

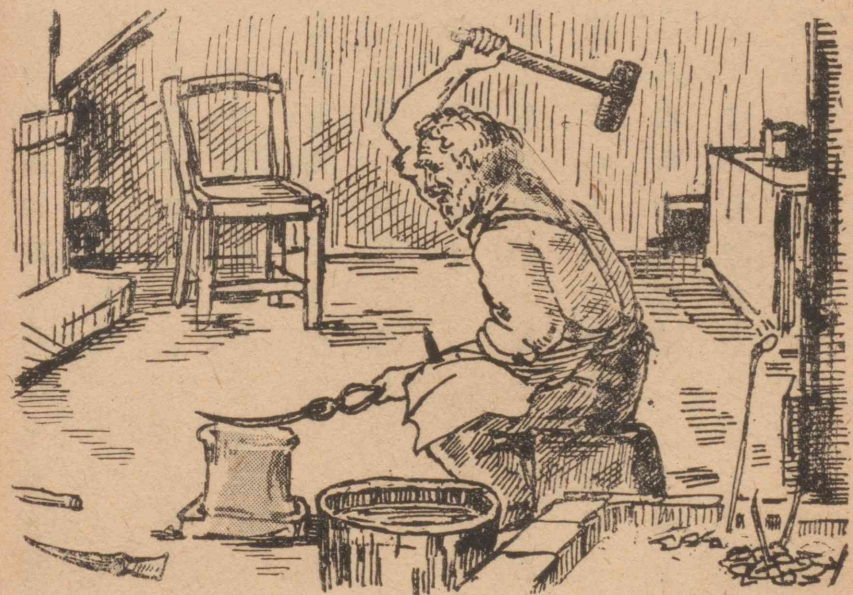
千八百六十五年の夏、マッターホルンを、ウイムバーの一行七名が、初めていたゞきまで登りましたが、山をおりる時四名

が落ちて死にました。この有名な登山のあつたころは、もうピツケルは今日のような形をして使われておりました。

ピツケルとリツクサクと山ぐつとの三つは、アルプス登山の時には欠くことのできない用具となつて、それがだんだんとくふうして作りなおされ、発達もしました。したがつて、どれにもそれだけを作る専門の人があらわれ、だれの作つたピツケルであるとか、だれの作つた山ぐつであるとかいふふうにも、ものよさと信用とをじゆうぶんそなえたものが、尊ばれ愛されてきました。たとえば、わたしの使っている山ぐつは、スイスのアマハという、山ぐつ作りの名人のも物ですが、三十年も登山に使つて、まだ形がくずれるようなことはありません。

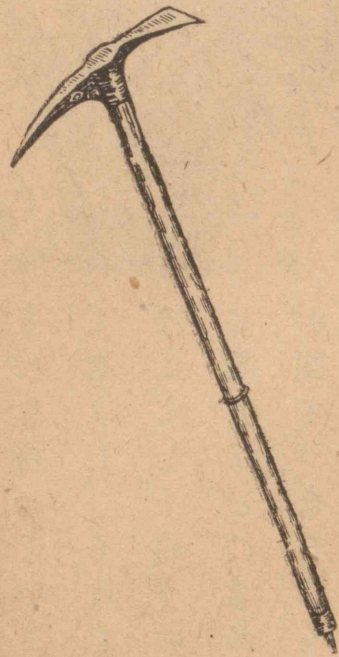
ピツケル作りの名人では、今から三十年ばかり前に、スイス

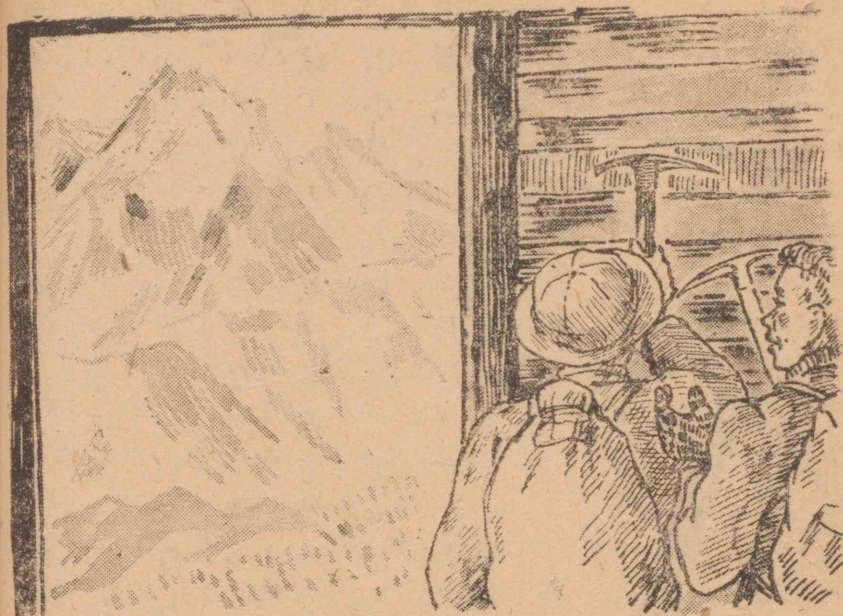
のグリンデルバルという山村に、
シエンクという老人がおりまし
た。山にかかる村道のそばにう
す暗い小さな仕事場を持ってい
て、ことば数の少ない、やせが
たの人でしたが、この人の作る
ピツケルは、まことにすばらし
いものでした。ピツケルの頭で
あるつるはしは、四角な一個の
鉄のかたまりをやいて、打って、
打ちだすのです。木のえをつけ
る足も、ついだものではなく、



打ちだしたものです。このおじいさんは、だんだん打ちだされ
ていくつるはしを手にとつてたたいては、そのすみきつた音を
聞かせました。たましいを打ちこんで作ったピツケルはなんと
もいえないみごとな光を持っていて、ただの用具という感じを
こえて、人にせまる力を持っています。

山小屋の入口には、よくピツケルがかけてありますが、同じ
小屋にとまる人のピツケルの中でも、シエンクのものといえ

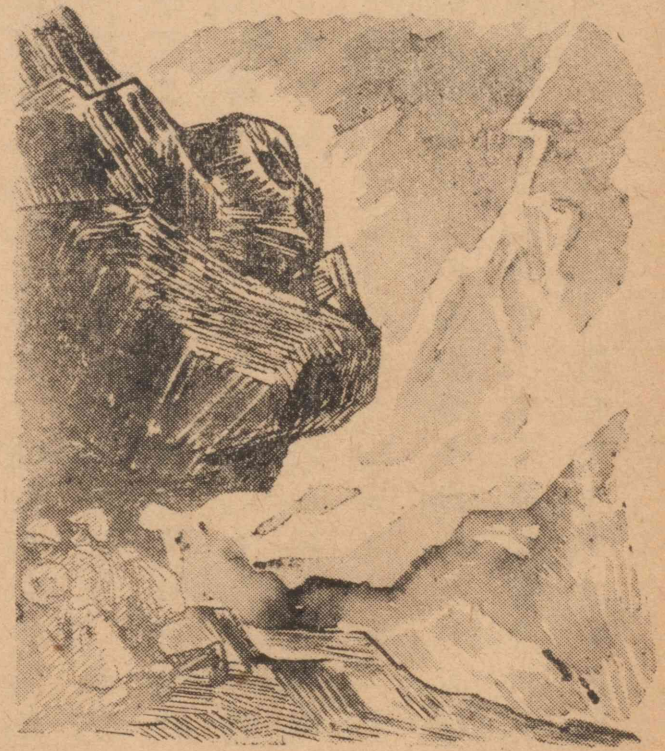




それを持っている人もほこらしく思うし、それを見る方の人もほこらしく思うのはもつともだと思ふほどの名品なのです。わが国で、今日作られるピツケルの大部分は、このシエンクのピツケルを手本にしたものです。ただ、もとの作者のシエンクのもののような、尊び重んじるだけのねうちのあるものが少ないということ、形だけはまねをしたものの、はげしく使うと折

れたり曲がったりするものでは役にたちません。シエンクのピツケルくらいになると、りっぱな芸術品と言ってもよいので、それを持っている人はたいせつに使うのももつともなこと、ピツケルは、雪と氷にはなくてはならない道具ですが、岩登りの時には、むしろじゃま者あつかいを受けます。両手を使ってよじ登るには、手足まといになるのでたいはリツクサクの中になさしこんでせおってしまうのです。わたしは何年前か前、ちちぶの宮のおともをして、西ほだかからおくほだかへ、岩の山かどを登っている時、急に、せおったリツクサクの中になさしておいたピツケルの石づきの先が鳴り出したことがありました。軽い放電を始めたのでしたが、すぐみんなのピツケルを集めて身のまわりから遠くはなし、間もなくやってきた

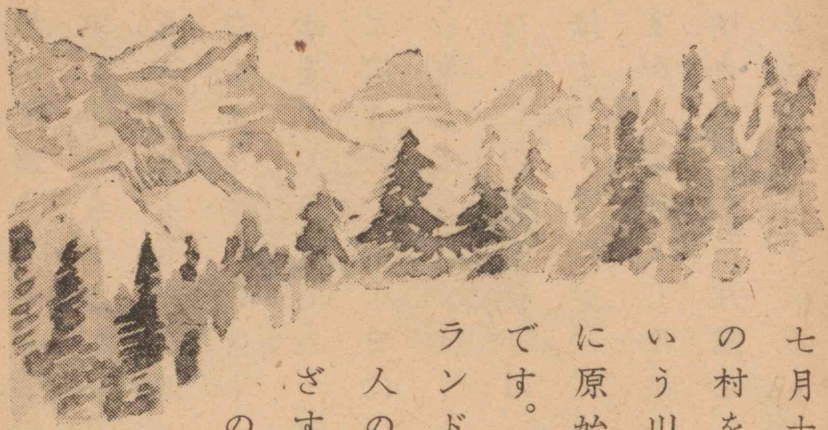
はげしいらい雨を岩かけにさけたことがあります。だれよりもはじめにその山のいただきに登ったしるしとして、ピツケルを山のいただきに残してくるといふ話もあります。が、もともとたいせつな道具ですから、そうしばしば行われることではありません。わたしが千九百二十一年に、初めてよじ登ったスイスのアイガーという山の、東の山かどのちよう上近くで、このおねを、初めて下ったブルグナーといふ



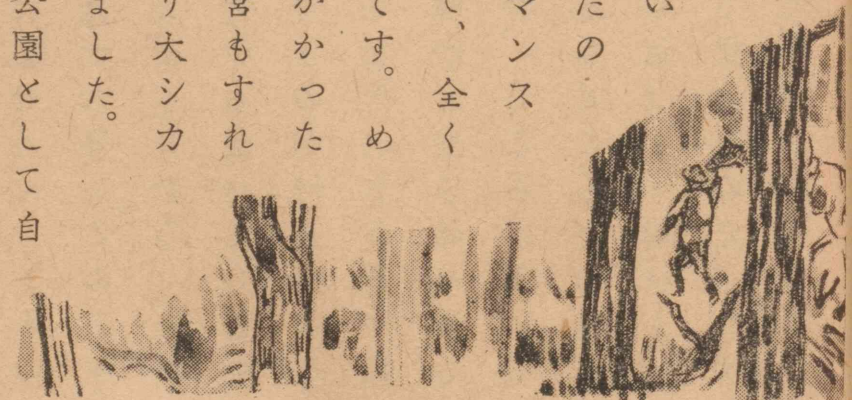
人が残したピツケルが、四十年近くも雪の中に立っているのを見ました。いまはこのピツケルは、ツェルマットの、山がく博物館に保存されてあります。

またわたしどもが、千九百二十五年、カナダのマウント・アルバータという山にいちばん初めに登ったことがあります。これは、カナディアン・ロッキーマ脈の中でも、第六番目に高いみね（四三九五メートル）で、けわしい岩のかべでかこまれているため、それまではだれも登りきれずに、残されておった山です。わたしらの一行六名は、この山をめざしていつさいの準備を整えました。登山用具や食料などはもちろんのこと、さつえい機、くつを直す道具、理はつ用具、医りよう品などから、ふつうのテントの外、写真暗室用のテントまで用意したのです。

ロッキー山中の小さな村のジヤスパイというところで汽車をおりて、マウント・アルバータのふもとまでいくためのウマをやとしました。ここで作りあげた隊はわたしら六人の外に、おりよく来ておったフリーレとコーレルという、スイスの山案内人ふたり、うまかた四人、すいじ係ふたりで、一行十四人と、その十四人の乗るウマ、それから二十四頭の荷ウマでした。この三十八頭からなる登山隊は、



七月十一日にジャスパイの村を出て、アサンスカという川をさかのぼって川ぞいに原始林の中の林道を進んだのです。このあたりは、ノーマンスランドといわれるだけあって、全く人の住んでいないところですが、めざす山のふもとまで六日かかったのですが、雨の日にも営もすれば、クマに出あったり大シカの群を見たりもしました。このあたりは国立公園として自



然が保護されているので、野じゆうもおそれません。テントのすきまからシカが顔を出したりします。七月十六日、この山すそを流れる谷川のほとりに根きよ地を作り、よく日から、あおぐような千八百メートルの岩のかべを、どこから登ったらよいかをさぐりました。結局、山の東の側の南寄りのがけを登ることになりました。二十日には、そのがけの下に小さなテントを張つてろ営しました。よく七月二十一日、午前三時から登り始めました。この時の登りは、岩のかべのかたむきが、ところによつてはまっすぐにつつたつたように、けわしく急なところもありますが、全体としては七十度ぐらいであつたでしょう。細かく、ゆきとどいた注意と、みんなが力を合わせて登つたので、どうとういただきに着くことができました。十六時間のたくましい



努力のおかげで、山のいただきに着いたわたしらの一行九人は、喜びのかたいあく手をかわし、ちよう上に岩のかけらを積んでケルンを作り、その中にピッケルを立てて残しました。それかわたしは、遠く日本からこの山をしたって来た者であると書いた紙きれを、あきかんに入れて石の下に置きました。その夜は、おねで寒い風にさらされながらからだを寄せあつてすごし、



あくる日、同じく十六時間かかって
ふもとのテントにおりたのでした。
ところが、よく年（一九二六年）
またスイスにいったのですが、ツエ
ルマツトという登山の中心地で、登
山に来ていたアメリカのハーバート
大学の学生と出会い「あなたは金の
ピツケルをマウント・アルバータに
残したそうですが本当ですか。」と
言われて、こんなうわさのあること
におどろきました。

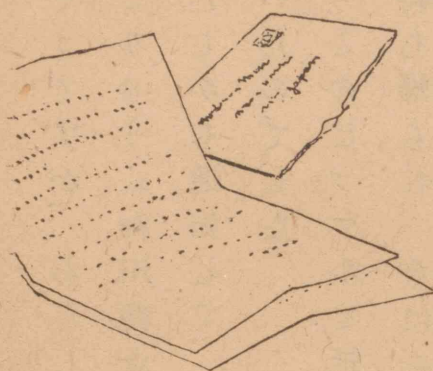
その後、太平洋戦争の終わったよく年、友人のカーター博士が
カナダから来て、いっしょにほだかだけや、やりがたけに登っ
たのですが、アルバータにはその後、まだだれも登らないどの

話でした。

しかし、千九百四十八年の秋、わたしの知らないアメリカ人
で、オーバーリンという人から「この夏第二回の登山者として
じぶんとアイレス博士とのふたりがマウント・アルバータに登
った。」というしらせがありました。そしてわたしがちよう上
に残して来たピツケルは、二十三年たつてもなお、幸いらいげ

きでさけることもなく、もどどおりに立
っており、残した紙きれもあきかんには
いったままであったとのことでした。

初めは、そのピツケルにほった、金の
イニシアルのMTHのHを想像して、日
本の天子さまのものではないかと思つた



そうですが、わたしらのアルバータ登山を応えんしたほそかわ
ごりゆう（細川護立）さんからおくられたものであることをわ
たしから通知して、やっと長年のうわさが、はつきりとかたづ
いたのでした。

このピツケルと紙きれとは、オーバーリンさんたちによって
持ち帰られ、今はニューヨークのアメリカ山がく会の一室に、
ていねいにならべられてあるそうです。

（まき・ありつねによる）

(二) 山へ登ろう

山へ登ろう

空いっぱい光をまきちらしている

あの銀いろの山へ登ろう

すそ野はボケやタンポポの花ざかりだ

ぼくらは明かるくうたいながら

まずこのししゅうの上をふんでいこう

ぼくらがふく口ぶえに

ミツバチのはおとがまじる

ぼくらはやがて こんもりしたじゆ海にはいる

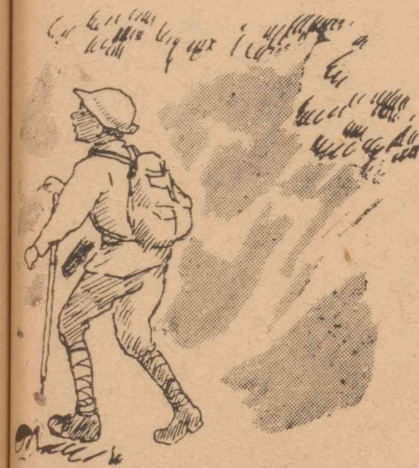
森は大きな家のようにだ

小鳥の歌は 妹たちの声のよう

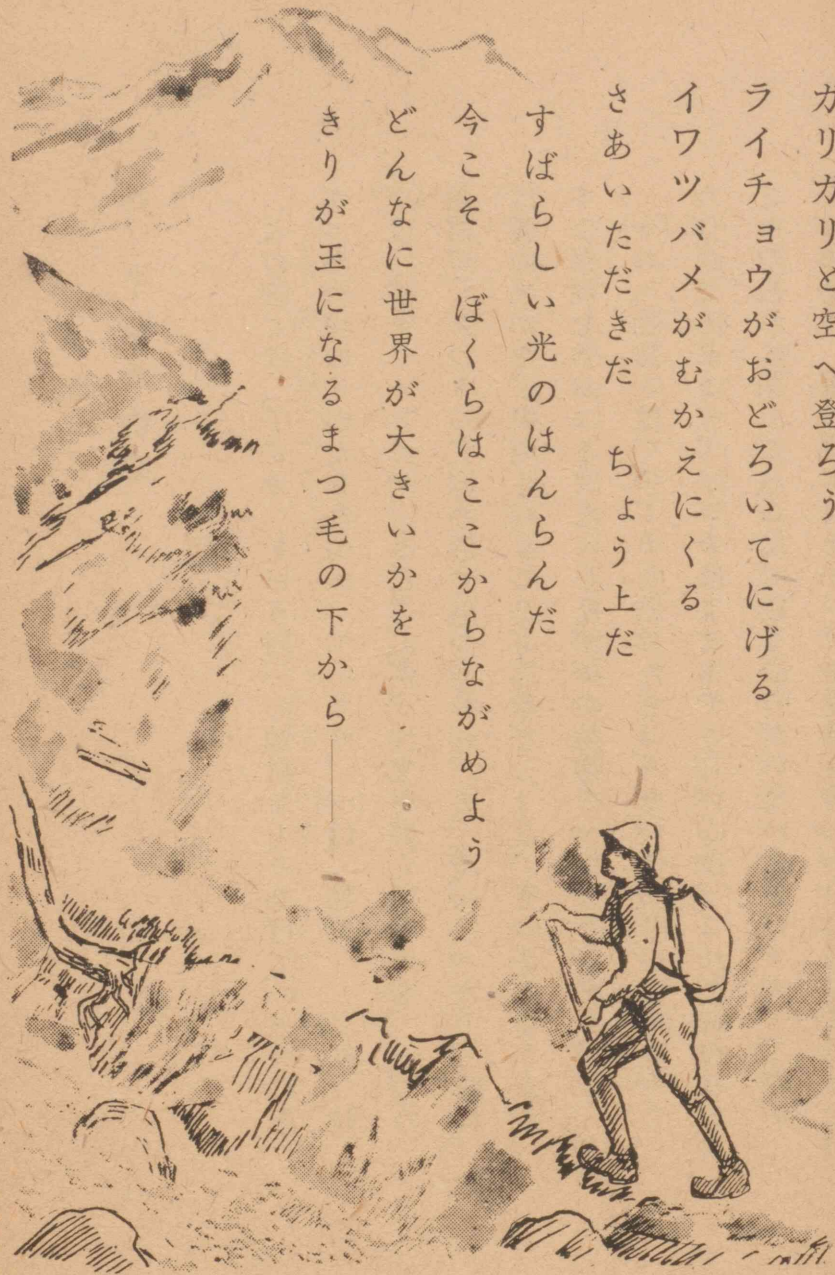
きれいな水音は おかあさんの声のようだ

そして 低くどよもす風音は
おとうさんの声だ
みんなここで ゆっくり休んでいこう
ここで 力をたくわえていこう
すいどうの水はいいか
ザイル（なわ）やピツケルはだいじょうぶか

さあこれからが
青空に切り立った岩の登りだ
ゆだんはきんもつ
両足に力をこめ
鉄のつめを立て



ガリガリと空へ登ろう
ライチョウがおどろいてにげる
イワツバメがむかえにくる
さあいただきだ ちよう上だ
すばらしい光のはんらんだ
今こそ ぼくらはここからながめよう
どんなに世界が大きいかを
きりが玉になるまつ毛の下から



五 子ジカ物語

この課では「子ジカ」という同一の題材をとりあげて、三つのがった表現のすがたをあつかっています。(一)は「物語」(二)は「詩」(三)は「シナリオ」です。みなさんが、作文を書く場あいても、一つの題材が、ふつうの文章の形であつかわれたり、詩になったり、時には劇のすがたで表現されることもあるでしょう。そのようなさまざまな表現を学ぶことはだいいな国語の勉強の一つであります。

(一)の「物語」は、子ジカを助けたきょうだいの美しい愛情にみちた作品であります。子ジカによせるやさしい心は、これを読むみなさんのむねに深くしみこんでいくにちがいないと思います。(二)の子ジカの詩は、森の親ジカと子ジカの愛情を美しい自然の中に表わし

ています。(三)は映画台本の一部をかんな形にしたものであります。みなさんに親しみ深い紙芝居や学芸会の劇とはちがった表わしかたであることに気がつくでしょう。映画を見るような心がまえで読んでごらん下さい。ここでは、子ジカに対する少年の愛情がどのようなにえがかれているでしょう。このように、子ジカという主になる題材が同じでも、表現されたすがたが、それぞれこととなっているのですが、子ジカに対する愛情を表わしているという点で共通したものがあつること、しっかりと読みとつてほしい、と思います。

よく読み味わつて、(一)・(二)・(三)を比べて考えてみましょう。

(一) 物語

シカがりの季節が始まって、まもないある日のことでした。わたしと弟とは、じぶんたちの住まいになつてゐるまる木小屋の外に、しっかりと手をつなぎあつて、立っていました。おかの方をおおいで、ふるえながら、かりイヌの声に、じつと耳をかたむけていたのです。どうやら、イヌどもは、運の悪いシカを、全速力で追いかけてゐるようです。わたしたちは、その時、いかにも、じぶんたちに力がないことを感じましたが、それについて、森に住むなかよしの友だちを、なんとかして助けてやれないものかと、一心に考えていました。



イヌのほえる声にまじつて、やぶをふみあらず、ガサガサという音がきこえるようになりました。イヌどもはおかのいただきを、ぐるりとまわつて、こつちへ出てくるように思われました。イヌの後からは、何人かの人たちが走つて来るようです。とつぜん、イヌの聲が変わつて、続けざまに、キャンキャンという、短いほえかたになりました。けもののおいが、きゆうにかぎわけられなくなったにちがいありません。すると、いきなり、子シカが一びき、ちゆうを飛ぶ勢いで、おかをかけおりてきました。風のような速さで、わたしたちの家を目がけて、とんでくるのです。人間の住んでゐる家へかけこむなんて、おそろしさの

ために、気がちがったのではあるまいか。それとも、この子ジカは、わたしたちがシカのみかただということを知っているのかしら。いのちがけても、シカを助けたいと思っているわたしたちの心を見ぬいているのだらうか。わたしは、そう思わずにはいられませんでした。なぜかといって、シカは一メートルあまりもあるかきねを、ひととびにとびこえて、わたしたちのところへ、かけよってきたからです。そして、そのまま、すぐ近くに立ち止まって、ふるえているのです。やさしい目は、おそろしさのために、きらきら光り、口のすみには、あわがたまっていました。

わたしは、つくりばなしをお話しているのではあり

ません。ほんとのことをそのままお話しているのです。その、かわいらしい子ジカは、からからにかわいた熱い鼻さきを、わたしの手にこすりつけました。びつくりして、ぼう立ちになっていた弟とわたしは、それで、やっとわれにかえって、両うでで、ビロウドのような、やわらかいシカのくびを、しっかりとだいてやりました。子ジカは、にげようとするどころか、かえって、ぐいぐい、からだをこすりつけてきます。わたしたちは、「どうか、助けてください。」と、たのまれて、いるような気がしました。わたしは、その子ジカが、かわいくて、たまらなくなりました。

「この子ジカの名まえは、レオナードよ！」





わたしは、子ジカのかぶの、ふんわりした毛に顔を、ぎゅつと、おしつけながら、そう言つて、弟を見ました。

けれども、弟は、もつとだいなことを考えていたのでした。それは、じきに、かりイヌどもが、シカのおいをかぎつけて、おかをかけおりてくるだろうということです。そうなれば、シカは、おどろいて、にげるにきまっています。はげしい勢いでにげるシカを、わたしたちの力で、だき止めることはできません。そんなふうにして、にがしたくはない。もう一度、あぶない目にあわせたくはない。だが、いつたい、どうしたらいいのだろう。



そういううちにも、イヌの声は、もう、キャンキャンという鳴き声ではなく、得意そうな、長くおをひいたほえ声に変わってきました。今にも、かりイヌどものすがたが現われるでしょう。そして、かりをする人たちは、じぶんたちのえものだから、レオナードをよこせというにちがありません。そしてきつと、わたしたちの見ている前で、このレオナードを――。

「肉だ！」

弟は、いきなり、低いけれど強い声で、そうさげびました。みなさんには、なんのことかおわかりにならないでしょうが、わたしには、弟の言う意味が、すぐに、のみこめました。どうして、じぶんが、今までそ

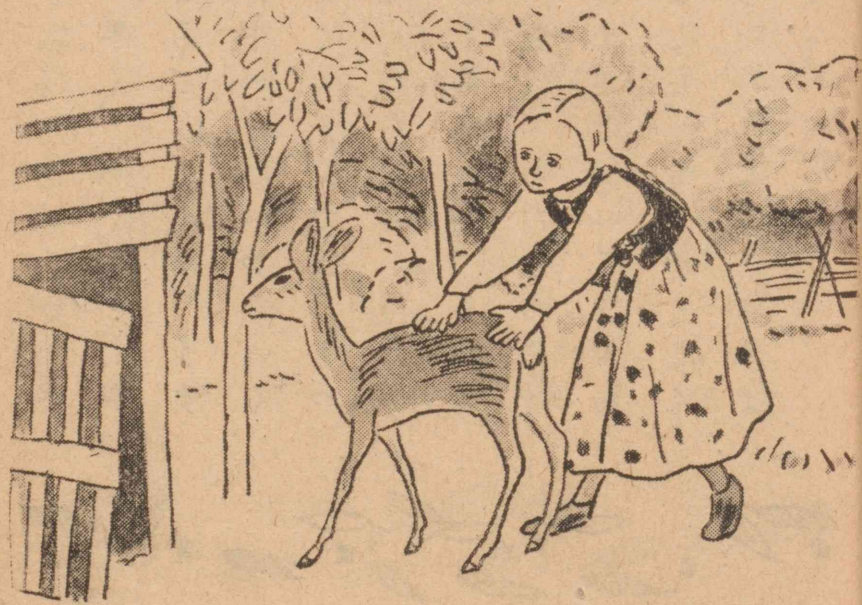


れに気がつかなかつたのだらうという気がしたくらいです。弟はどういうふうにして、レオナードを助けるつもりかということ、手短かに話してきかせました。その間も、子ジカは、心細そうに、前足をふるわしながら、さも、こわくてたまらない、という目つきで、おかの上を見つめ、かわいい鼻を、ぶるぶる動かしていました。それでいて、やっぱり、わたしたちのそばから、はなれようとはしないのです。

わたしは、なんとかして、子ジカを、ニワトリのたまごをかえすために建ててある小屋の中へ、連れこもうとほねをおりました。シカは、トリ小屋のにおいになれていないうえに、小屋の中が暗いのが、いやだと



みえます。初めのうちは、しりごみして、なかなかはいらうとしません。こんな、へんな場所にかくれていればだいじょうぶだなどということは、子ジカにはわからないにきまっています。けれども、わたしにたよっていれば安心だということはおわかっていたのです。たしかに、それにちがいはありま



せん。だって、さもなければ、いくら、わたしが、「そら、そら、ここへはいるんだよ。早く、早く。」と、やさしい声をかけ、手でおしたところで、そんな、うす暗い、いやなおいのする小屋の中へ、はいつていくわけはないと思うのです。とにかく、子ジカは、やつと小屋へ、はいりました。そこで、わたしは、待ちかねたようにして、バタリと、戸をしめました。その音におどろいて、レオナードは、一度は、わたしのそばから、とびのきました。すぐにまた近づいてきてわたしに、からだをすりつけてきました。せつかくしんせつにしてくださるのに、おどろいたりして、すみませんと言っているようなふうでした。

そのあいだに、台どころへとびこんだ弟は、血のたれるような肉のかたまりをひつつかんできました。それは、わたしたちのばんのごちそうになるはずのものだったのです。弟はじぶんのジャックナイフで、それを、いくつかの小ぎれに、切りながら、おかをかけ登っていきます。わたしは、はめ板のわれ目から、弟が、さつきレオナードの出てきたやぶのところまでいきつくのを、ちゃんと見とどけることができました。弟がいきつくとき、弟がいきつくすぐでした。かりイヌが一ぴき、舌をだらりとたらし、鼻で地面をこするようになって、やぶの中から出てきました。そのイヌが、「ウォーッ」とほえるのを聞くと、わたしが、小屋の中でかかえてい





るレオナードのからだだが、びっくりと、ふるえました。イヌに追いかけられているのは、レオナードではなくて、このじぶんのような気がしたのです。

弟はシダのしげみにかくれて、そこから、イヌが、ちよこちよこ、走っていくさきへ、肉の小ぎれを、ぽんと投げました。だが、イヌは見向きもしません。シカの足あとをかぐことにむちゆうなのです。弟は、また投げました。こんどは、



イヌの、ちよこ鼻さきへ、うまく落ちました。イヌは、いきなり、それをのみこみました。あとから出てきたもう一匹のイヌは、初めに、弟が投げた肉を見つけて、それをたべました。

二ひきのかりイヌは、あとから、あとから、投げられる肉を、またたくまに、みんなたいらげてしまいました。そして、肉がなくなった時は、レオナードの身が安全になった時でした。今たべた新しい肉のおかげのおかげで、イヌどもの鼻がきかなくなってしまったからです。

まもなく、おかをかけおりて来た、かりをする人たちは、まごまごしているイヌどもを、ひどく、しかり

ました。けれども、すぐそばに、ぼんやり立っている少年が、イヌの鼻をきかなくしてしまったのだということ、わかるはずがありません。まして、すこし、はなれた小屋の中で、小さな少女が、その人たちの追いかけてきたえものをだいて、ふるえていることなど、想像もつきません。かりをする人たちは、イヌをしかりしかり、また、やぶの中へ帰っていききました。

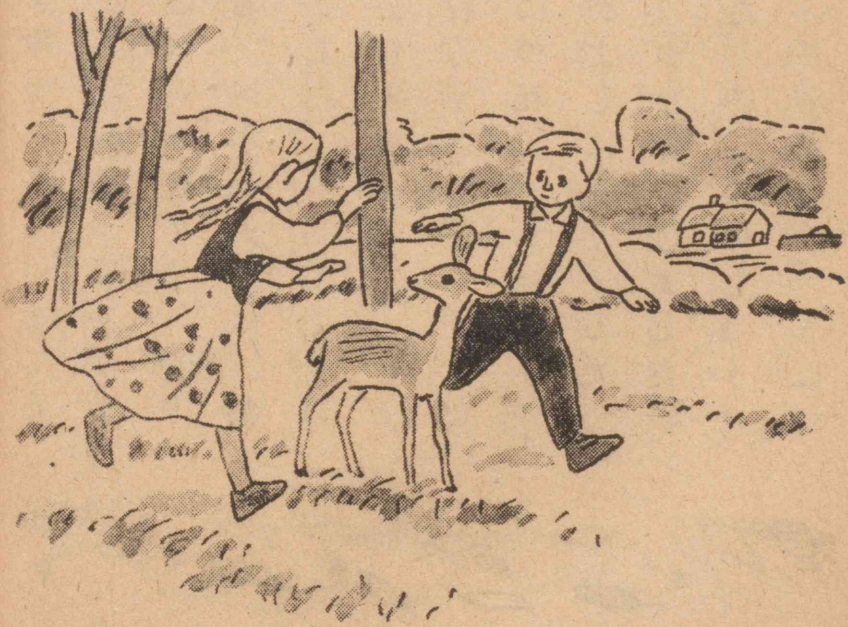
こうして、あぶなく、その場をきりぬけることはできませんでした。すぐレオナードを森の中へかえしてやることは心配です。少なくとも、シカガリの季節が済むまでは、かえしてやれません。わたしたちは、おとなの人たちにたのんで、小屋を中へかこいこむように、

かなり大きい、かなあみのおりを作ってもらいました。おりには、てんじょうにも、かなあみが張ってあります。夜は小屋へはいつて、ねればいいわけです。かりイヌの声がおかの森できこえる間、レオナードは、無事に、ここですらすらすることになりました。わたしたちは、森中のけものを入れてやれる安全な場所をこしらえることができたら、どんなにいいだろうと、思わずにはいられません。日がたつにつれて、レオナードは、だんだん、わたしたちとなかよしになりました。初めは、おりから出す時には、つなをつけたましたが、やがてそれもいらなくなりました。子ジカはちょうど、イヌのように、わたしたちについて歩きます。きれい



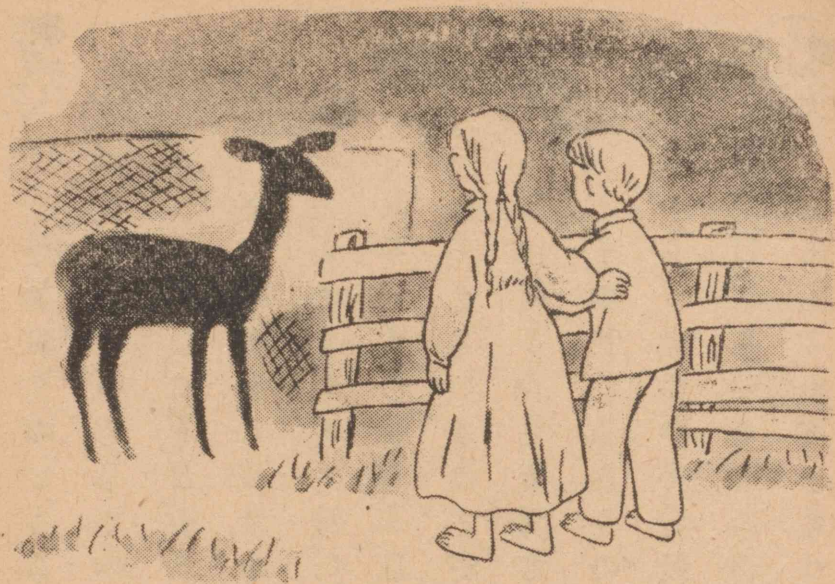


な、きやしゃな足どりで、とつとつと、先へかけぬけていったかと思うと、立ち止まって、わたしたちをふりかえります。大きな耳を、すこしかしげて、わたしたちの顔をながめます。みどりの森を後にして立ったレオナードの、すつきりしたすがたくらい美しいものは



ないというのが、わたしと弟とのいっちした意見でした。

レオナードは、じきにじぶんの名まえを覚えて、よばれると、とんでくるようになりました。たべものは、なんでもたべます。クッキー、リンゴ、チシヤの葉、さとうがし、中でも、いちばんすきなものは、チュートインガムでした。初めは、弟がいたずら半分にやってみたのですが、たいへん気に入ったとみえて、いつまでも、かんでいました。それから後は、弟のポケットへ鼻をつっこんでねだるようになりました。弟が、いつも、そこへ入れておくことを覚えてしまったのです。



らくでした。そこから、庭へと
びおりるのは、なんのぞうさも
ありません。
わたしたちは、かきねのかけ
をつたって、小屋とおりが見
えるところまで出ました。月は
あるのですが、厚い雲にかくれ
ていました。何か黒いものが、
かなあみの前で、おちつきなく
動いているのが、ぼんやり見え
るだけです。それは、おりのそ
ばからはなれていくかと思うと、

とにかく、わたくしどもは大満足でした。
レオナードも満足らしくみえました。
あるばんのこと、ふいに目がさめて、気がついてみ
ますと、弟が、しきりに、わたしの手を引っばって
います。
「ねえ、レオナードのおりのそとに、何かまきっているよ
うだよ。クマか山ネコが、ねらっているんじゃない
かと思うんだ。」
弟が、ひそひそ声で、言いました。
ふたりは、さっそく、ねべやのまどから、台どころ
の屋根へ、はい出しました。無論、白いねまきのまま
です。屋根から、家の後のかきねの上へおりるのは、





また、おりのところへ帰ってきます。いくどとなくそれをくりかえしているのです。

しだいに、目がうすやみになれてくると、レオナードが小屋からおりの中へ出てきているのがわかりました。わたしたちは、目を見あわせました。敵にねらわれているのなら、レオナードが、こうして、小屋から出てきているはずがない。それが、ふたりの心に、同時に起こった疑問でした。

その時、ふたりの疑問に答えるように、雲のきれ目から、青白い月が顔を出しました。そして、わたしどもは、ちいさなあかりのような四つの目が、じつとじぶんたちの方を見つめているのを、みとめることがで



きました。たった今、動物たちは、人間のおいをかぎつけたところだったので。弟とわたしは、いきなり、手を取りあって息をこらしました。

きゆうに、二つのあかりが消えました。おりの外にいたすらしとした動物が、大きくはねて、くらがりの中へにげたからです。しかし、それが、ほっそりしたメジカのすがただったことはたしかです。わたしたちは、それが、じぶんの子供のいどころをさがしあてて、たずねてきたレオナードのおかあさんだということがわかったのです。

ふたりは、はい出した時と同じように、まったく音を立てずに、まどから、へやへ帰りました。それから

長い間、弟は、弟のね台の上で、わたしは、わたしのね台の上で、大きな目をあけて、やみを見つめていました。なかよしになった子ジカを家においておくことは、別に悪いことではない。ふたりとも、いつしゅうけんめい、じぶんにそう言い聞かせようとしているのでした。けれども、わたしたちがあれほどかわいがっている、あのとび色の子ジカをよび求めていることを、どうしても、わすれることができないのです。つまり、わたしたちはレオナードと別れなければならないのだ。レオナードは森のふるさとへ、かえしてやらなければならないのだ。それがわかっていないことはなかったのです。

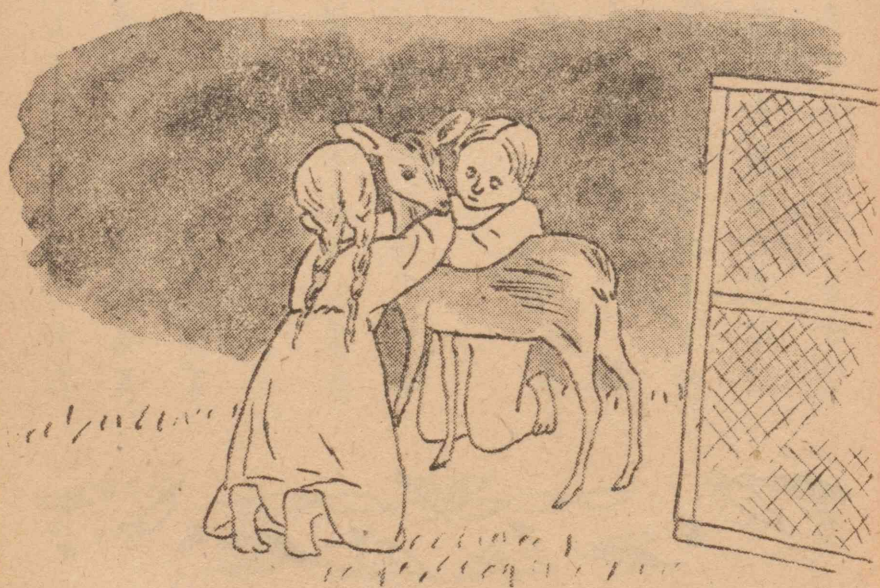
あくる日、わたしたちは、ゆうべのシカは、レオナードのただの友だちで、おかあさんではなかったのはあるまいかと話しあいました。レオナードと別れることは、なんとしてもつらいので、無理にも、そういうふうに思いたかったのです。子ジカは、その日一日中、おちつきませんでした。森から何かきこえてききますまいかと、たえず、耳をそば立ててばかりいました。だいすきなチューインガムも、あまり欲しがらないくらいでした。

そのばんは、どこへはいつても、ねむることができませんでした。何ももの音がきこえてきたわけではありませんが、どうも、レオナードのおりのあみの外で、





レオナードは、すぐ出てきて、わたしの手に鼻づらをこすりつけました。わたしたちは、地面にひざをついて、レオナードのからだをだきました。そして、そのやわらかい、レオナードらしいにおいにするくびに顔をおしつけて、もう、シカがりの季節が済んだのだから



すらりとしたとび色のからだをすりつけているものがあるような気がしてなりません。がまんできなくなつて、また、ふたりは屋根へはい出していききました。
メジカは、やっぱり、きていました。そして、わたしたちが近づくと、さっと身をおどらせて、にげました。森の方からメジカからだすとすれあう木の葉の音が、サラサラと、きこえてきます。けれども、わたしたちは、メジカが遠くへはいかないこと、また子供のころへ帰ってくることを知っていました。
弟とわたしとは、急いで、おりのところへ行って、思いきって戸をあけました。

ら、おかあさんのところへ帰らなければいけないのだと話して聞かせました。話しているうちに、ふたりとも、なみだが出て来るのを止めることができませんでした。

わたしたちは、そつとその場をはなれようとしてしました。ところが、レオナードも、いっしょについてこようとするのです。

「どこへいくのです。どうしてぼくを連れていってくれないのですか。」と、言いたそうなようです。あとも先にも、初めて、わたしたちは、レオナードのからだを向こうへつきはなしました。わたしたちには、それが、どんなにつらいことだったでしょう。レオナ

ードは、わけがわからないというようすで、いくぶんおこったように、その場に立ち止まりました。そのひまに、わたしたちはかきねのところへかけよって、大急ぎで、屋根までよじ登ってしまいました。

そこまでくると、もう一度、あとを見ずに、へやへはいることはできませんでした。

レオナードは、ちよつとの間、とほうにくれたすがたで、月の光の中へ立っていました。しかし、まもなく、やぶの中から、明かるい二つの目がのぞきました。それから、すがたのよいメジカのかげが、うかぶように現われました。レオナードは、かるくおどりながら、おかあさんのところへ、かけよりました。四つのとも



しびのような目が、ちよつとの間、わたしたちを見つめている
ような気がしましたが、やがて、それも消えました。二つの黒
いかげは、なかよくならんで、森の中へ、すがたをかくしてし
まったのです。木の葉のサラサラ鳴る音がきこえて、あとほし
んと静まりかえりました。

だまって、わたしたちは、ねどこへはいりました。だいた
ってから、弟のすすりなく声が、まくらに顔をうずめたわたし
の耳にきこえて来ました。

(二) 子 ジ カ

子ジカはすわったままのしせいで首をめぐらした。

うっとりとしたそのひとみに

雪の白さと森のみどりがうつつて動く。

その時、

子ジカのやわらかな耳がびん感に動いた。

親ジカの足音を聞きつけたのだらうか。

子ジカはとびだした。

まっしぐらに、子ジカのかげは

起ふくするおかをこえ、

このまをぬって、

木の根につまずきもせず、

谷川の岩かげに親ジカを見つける。

子ジカは谷川の水を白くとばしながら
コウと鳴いた。

親ジカは、コウ、コウと答える。

そして、じぶんのかげをうつしながら
水を飲む。

子ジカも、じぶんのかげをうつしながら
水を飲む。

親ジカが、しぶきをあげてかけていった。

子ジカも、しぶきをあげてかけていった。

やがて、谷川のしみずは静かに白い雲を流した。

(三) シナリオ

(しだいに明かるく) 小屋の外——家のそばに井戸を作る費用
を得ようと思つて作ったタバコのなえどこを、フラッグ (子
ジカの名) がさんざんにふみ荒してしまっている。

「このタバコの種をかうお金をためるのに、ずいぶん長くかか
ったね。」と、父がジョデイ少年の顔を見て言う。

「おとうさん、フラッグは悪気があつてしたんじゃないよ。」と
ジョデイが、かわいがつている子ジカのために弁解する。

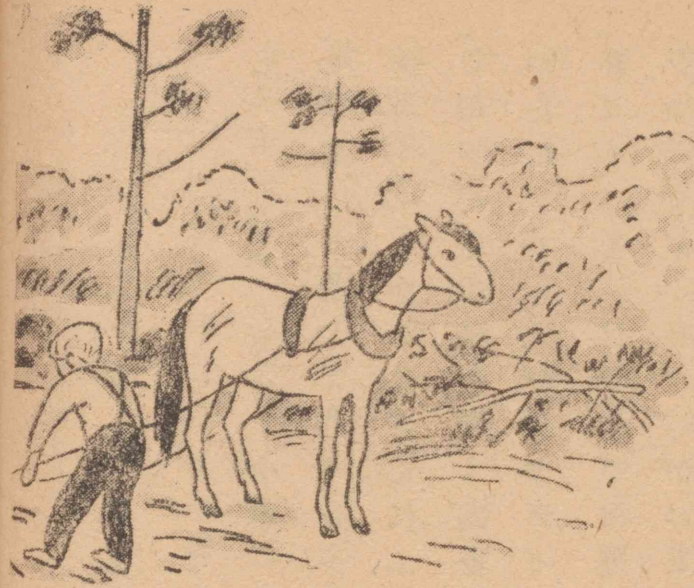
「フラッグは、もう一年児になつたのだから心配なのさ。」

ジョデイはじぶんが悪いことをしてしかられたような気がし

てしよげてしまふ。少年はタバコのかきをゆわえたぼうを立て
るてつたいをしようとする、よい考えがある。イモ畑のうら

の地面を耕そう。木の切り株を
少しのければ、ワタが植えられ
る。ワタは金になるから、井戸
が作れるよ。と父がやさしく言
つてくれる。ジヨデイはなきた
いくらいうれしくなった。

(画面が重なって次の画面へ移る)



太い切り株に結んだ鎖を馬
に引かせ、父はてこを切り株
の下にさしこみ、全身の重さ



をたかしてかけて切り株をほり
起こそうとしている。とつ然
父はてこに打たれて、横はら
をおさえてしゃがみこんでしまふ。ジヨデイがおどろいてか
けよると、父はだいたいじょうぶだと言うが、顔色がまっさおで
ある。ジヨデイがウマを鎖からはずし、父を家へ連れて帰る
したくを始める。

(画面が重なって次の画面へ移る)

父のしん室——父がベットに横になつてゐる。

ジヨデイ、「おとうさん、当分らくにしてなくちゃだめですよ。」

父「そうだな。もし、五・六日起きられなかつたら、家のこと
は、おまえが引き受けられるかね。」

ジョディ 「引き受けられますとも、おとうさん。」

父 「何をしたらいいか知っているのかい。」

ジョディ 「マメにくわ入れをして、トウモロコシにネキリムシがつかないように気をつけて、それから――」。

父 「一年児になった子ジカを畑に入れないようにすることは、よくわかってるだらうね。」

ジョディ 「もちろん、畑へなんか入れ

ませんよ。おとうさん。」

父 「よし。入れるんじゃないよ。気をつけなさいよ。」

ジョディ 「ええ、なんでもぼくが引き受けてやりますからね。」

父 「もうねたほうがいいよ。あすは、ずいぶん仕事があるからね。」

ジョディ 「おとうさんも、よくやすんで、早くよくなってくださいね。」

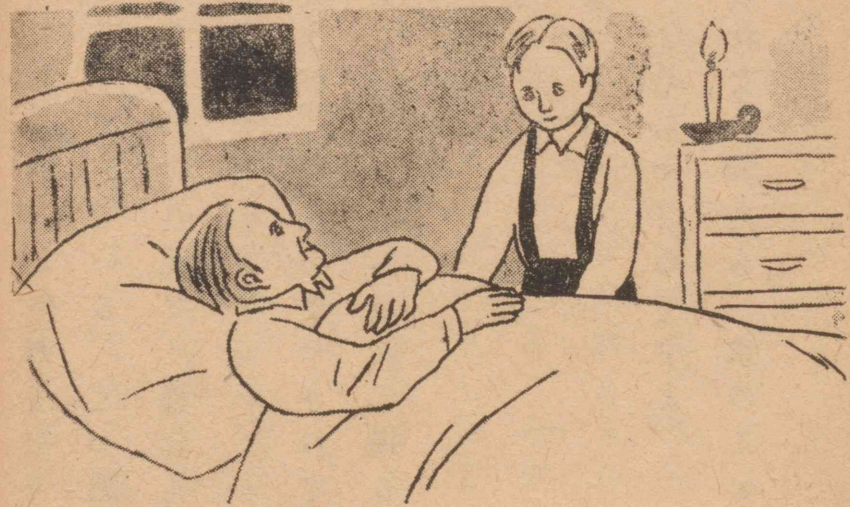
父 「わかったよ。」

ジョディ 「おやすみなさい。」

父 「おやすみ。」

(画面が重なって次の画面に移る)

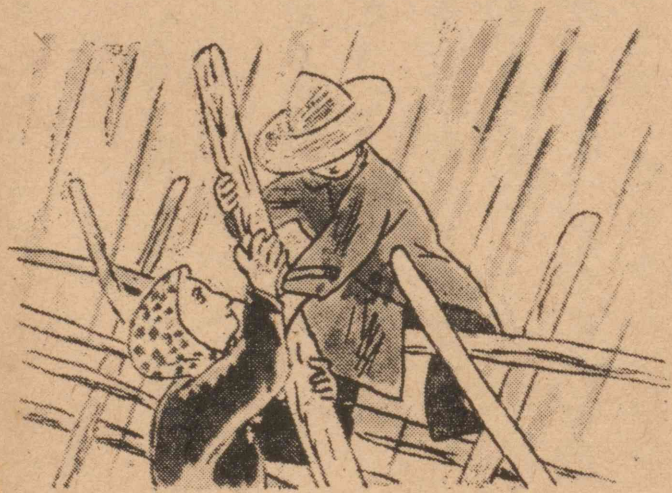
ジョディがじゆうを持ち二・三ばの鳥をさげて帰ってきて、

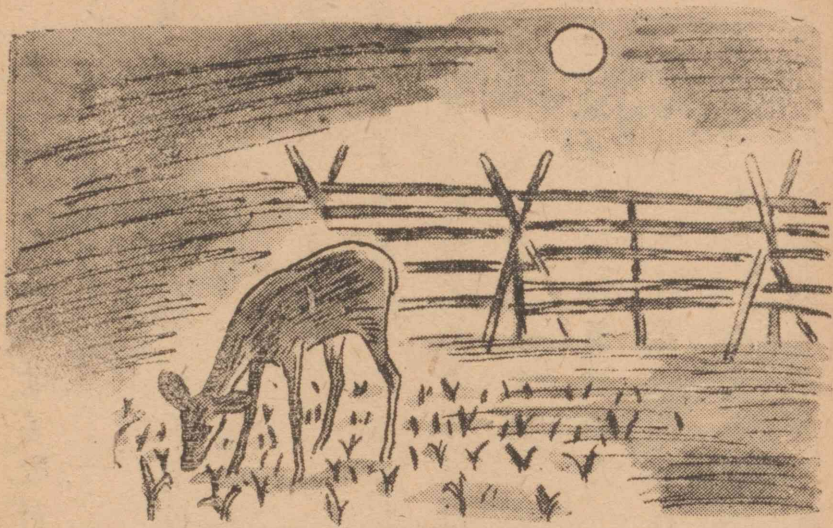


ねている父にほこらしげに「これおとうさんのぼんごはんのおかずだよ。二発しかたまを使わなかったよ。」と言う。「ぼく、なんでもうまくやれるでしょう。何もかもよくいっているよ。おとうさん。トウモロコシだつて芽が出たし——。」と言いかけて、ジョデイは父のむずかしい顔に気がつく。「おまえがトウモロコシを見たのはいつだね。」きのうだよ。三センチぐらいものびていたよ。「おかあさんは、だれかが食つてしまったと言っているぞ。ほとんど全部だめになった。」それがフラッグのしわざだと言われ、ジョデイは急いで畑へ出てみる。なるほどトウモロコシの芽は、ほとんどくい荒さされている。

(画面が次の画面へ重なって移る)

父のしん室——ジョデイに「倉庫に残っているトウモロコシを全部取り出してまいて、その周囲に高いかきねを作れ。」と命じる。ジョデイは、言いつけられたとおり、トウモロコシのつぶをはじき落とし、ウマにすきをひかせて畑を耕し、くわでうねを作り、種をまきつける。その周囲にまるたを運んでさくを高くする。高いさくを作るのは容易なことではない。何日も何日もかかってジョデイは働く。そのいっしょうけんめいなジョデイの努力を見て、母もてつだつてやる。





父「ジョデイ、ここへおいで。そばへおいで。家族が生きていくたべつに立っているジョデイをよぶ。ベツトに起きあがった父が、戸口

高いさくがやつとできあがる。感げきしたジョデイは、母にだきついてさけぶ。

ジョデイ「どうとうできたね。おかあさん！ぼくたちの力だね。おかあさん。」

母「そんなに強くだきつくのはよしておくれ、ジョデイ。」

ジョデイ「おかあさん、てつだつてくださって、ありがとう。」

母「わたしは、おまえがこんなに働けるとは思わなかつたよ。これでどうやら、無事に作物がとれそうだよ。」

ジョデイ「そして、おかあさん、ぼくらのさくは、とてもすてきだね、おかあさん。」

母「さあ、家へはいつておとうさんに、わたしたちで作つたことを話そうね。きつとおとうさんは喜んでくださるよ。」

めには作物にたよらなければならぬことを知っているね。」

ジョディ 「はい。」

父 「あとからあとからこうくい荒されたんでは、たまったもんじゃない。」

ジョディ 「そうです。」

父 「おまえも知ってるとおおり、あの野育ちの一年児が作物をくい荒すのをとめる方法はない。」

ジョディ 「知っています。」

父 「おまえには気の毒だ。わたしがどのくらい気の毒に思っているか口では言いあらわせない。だが、できるだけのことはした。あの一年児を森へ連れて行って、殺しなさい。」

ジョディ 「おとうさん！ おとうさん！」

(画面が重なって次の画面へ移る)

森の中——フラッグのくびにかけたつなを、ジョディが持つているが、日ごろかわいがっていたフラッグをととも殺すことはできない。

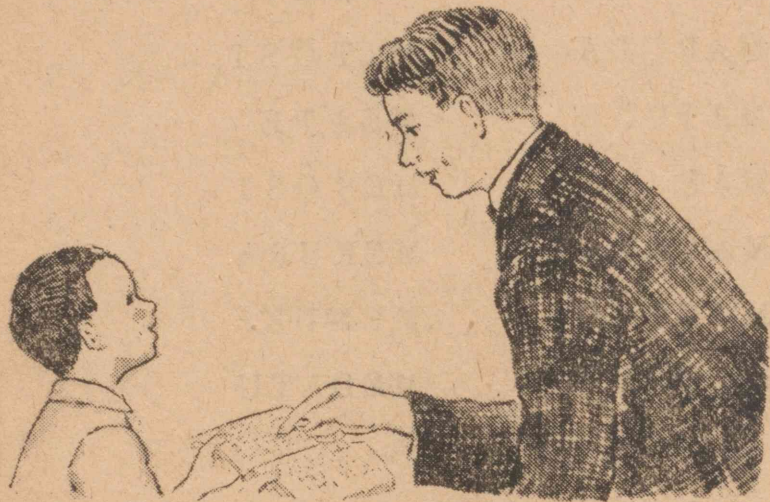
ジョディがフラッグに、どこかへ行って二度と帰ってくるなどと言いきかせる。

ジョディ 「フラッグ、おまえはいかなくちゃならないのだよ。そして二度と帰ってくるなよ。おまえは、もうおとなになったのだからね。おまえは悪いことをしたんだ。する気がなくなつてもね。おまえはじぶんでじぶんのことはやっていけるね。ね、できるね。だいじょうぶだね。おまえはりこうだ。それに、ぼくは、ぼくはおまえのことはもう何とも思っていないん



だよ。おまえが小さかった時のようにかわいくないのだよ。
そうだ。さあ、お行き。もうこのへんじゃだれもおまえに用
がないんだ！ お行き、わかったかい。さあお行き。
おまえを助けるために、ぼくがしてやれることは、もう何も
ないんだよ。さあ、このへんにいたら、きつと殺されるよ。
もう二度と帰ってくるんじゃないよ！ きつと帰ってくるん
じゃないよ！」
フラッグはジョディに追わ
れて森のおくへすがたを消す。
ジョディはそれを見送ってい
る。





いました。この研究を続けて、まとまったら言語学者に見てもらい、ひ評してもらおうと言われました。

わたしは、先生にほめられたことも、うれしいと思いましたが、それよりも、“ことば”の研究のおもしろさを知ったことが、うれしいのです。

わたしたちが、ふだん何とも思わずに使っている“ことば”も深く考えてみたり、辞書をひいて調べてみたりすると、ずいぶ

んおもしろいものです。なにげない“ことば”にも深い意味を見つけたり、その“ことば”の成りたちがわかったりして、ゆ快なものです。

この研究をこれからいっそう力を入れて続けていくつもりです。来月の研究発表会には、もっといい報告ができるように努力いたします。

(終り)

いと思いました。

“ま”は“まつげ”“まなこ”などからも気がつくように“ま”は“目”という意味です。“み”のつくことばを読み返してみると、“見る”という意味を持っていることがわかります。すると、“ま”も“み”もやはり“目”からできた“ことば”にちがいありません。

まと (的) まぼろし まゆ (目の上の毛)
まぬけ まざまざと

みせ (店) みせもの めずらしい

などの“ことば”も、目を中心にしてできてきた“ことば”かもしれませぬ。

わたしは、ノートになにげなしにローマ字で書いてみて、びっくりしました。それは、どの“ことば”にもみんな“M”がついているのです。

MANAKO	MIRU
MABUTA	MITŌSI
MATUGE	MEATE
MAE	MEBOSI
MABATAKI	MEKURA
MIGOTO	MENUKI
MITOMERU	MEDATU

こんなきれいに“M”がならぶのは、どのことばもみんな“ME”という“ことば”からわかれて成りたってきたからではないでしょうか。

わたしは、大発見でもしたように、大喜びをして、さっそく先生にこの研究を報告しました。先生は、“よく研究したね、いい国語の勉強だ。”と、ほめてくださいました。そして、わたしのこの研究のために、文字や“ことば”の参考書を貸してください

みわける……目で見て分ける。見さだめて
て区別するという意味です。

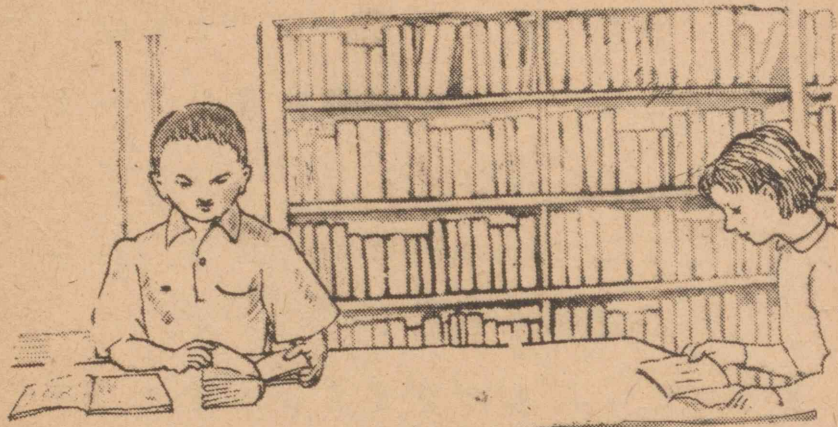
みとおし……こちらから、はるか向こう
まで見ること。ことの成り行きを
前もって知ること。目で見えない
内部のことやこれから先のことを
見ぬくことの意味です。

こうしてみますと。“目”という一つの
“ことば”に深い関係をもっているたくさ
んの“ことば”を使っていることがわかり
ます。これらの“ことば”は，“目”の兄弟
や、いとこのような関係にある“ことば”
と言ってもいいでしょう。“目”という“こ
とば”を中心に、つぎつぎに、深いつなが
りのある“ことば”ができてきたのだらう
と思いました。

目(め) ① 見る。② 見守る。③ 見送る。④ 見届ける。⑤ 見届ける。⑥ 見届ける。⑦ 見届ける。⑧ 見届ける。⑨ 見届ける。⑩ 見届ける。⑪ 見届ける。⑫ 見届ける。⑬ 見届ける。⑭ 見届ける。⑮ 見届ける。⑯ 見届ける。⑰ 見届ける。⑱ 見届ける。⑲ 見届ける。⑳ 見届ける。㉑ 見届ける。㉒ 見届ける。㉓ 見届ける。㉔ 見届ける。㉕ 見届ける。㉖ 見届ける。㉗ 見届ける。㉘ 見届ける。㉙ 見届ける。㉚ 見届ける。㉛ 見届ける。㉜ 見届ける。㉝ 見届ける。㉞ 見届ける。㉟ 見届ける。㊱ 見届ける。㊲ 見届ける。㊳ 見届ける。㊴ 見届ける。㊵ 見届ける。㊶ 見届ける。㊷ 見届ける。㊸ 見届ける。㊹ 見届ける。㊺ 見届ける。㊻ 見届ける。㊼ 見届ける。㊽ 見届ける。㊾ 見届ける。㊿ 見届ける。	目(め) ① 見る。② 見守る。③ 見送る。④ 見届ける。⑤ 見届ける。⑥ 見届ける。⑦ 見届ける。⑧ 見届ける。⑨ 見届ける。⑩ 見届ける。⑪ 見届ける。⑫ 見届ける。⑬ 見届ける。⑭ 見届ける。⑮ 見届ける。⑯ 見届ける。⑰ 見届ける。⑱ 見届ける。⑲ 見届ける。⑳ 見届ける。㉑ 見届ける。㉒ 見届ける。㉓ 見届ける。㉔ 見届ける。㉕ 見届ける。㉖ 見届ける。㉗ 見届ける。㉘ 見届ける。㉙ 見届ける。㉚ 見届ける。㉛ 見届ける。㉜ 見届ける。㉝ 見届ける。㉞ 見届ける。㉟ 見届ける。㊱ 見届ける。㊲ 見届ける。㊳ 見届ける。㊴ 見届ける。㊵ 見届ける。㊶ 見届ける。㊷ 見届ける。㊸ 見届ける。㊹ 見届ける。㊺ 見届ける。㊻ 見届ける。㊼ 見届ける。㊽ 見届ける。㊾ 見届ける。㊿ 見届ける。
---	---

(三) Mのつくことば

わたしは、この研究をしながら、ふとお
もしろいことを、見つけました。
それは、“目”に関係の深い“ことば”
には多くの場あい“ま”“み”“め”がつい
ているということです。ま、み、めの三文
字は、みな“マ行”にならぶ文字です。
これには、何かわけがあるのかもしれな



またたき……目をぱちぱちすることです。

ぱちぱちするわずかな時間を、“またたくま”と言います。

めぼし……目じるしとか目あての意味です。“目ぼしがついた”といえは、およその見当がついたことを表わします。

まどう……目にはっきり見えないので“まよう”ことです。みこみがつかなくて“まよう”ことにも使われます。

まぶか……目がかくれるほど深くとい

う意味で、ぼうしなどを深くかぶるさまを言う時に使います。

まえ……前、目が向かっていて見える方という意味です。“え”は方向を表わします。

まのあたり……目のまわり、すぐ目の前に見えることです。

みぐるしい……見るのが苦しい。みっともない。見にくいという意味です。

みごと……見て美しいこと。見るにあたいすることという意味です。

みとめる……目にはっきり留めて、たしかに知るという意味です。

みにくい……目で見るのが、いやらしいとか、見たくないという意味です。それが、見たいけれども、じゃまものがあってよく見えないという時にも使うようになっていきます。

(二) 目ということば

次に、目に関係する“ことば”を、ノートからぬきだしてみましよう。

めだま……………目のたま
 まなこ……………目の子、くろ目
 まぶた……………目のふた
 まつげ……………目の毛
 まなじり……………目のはし

以上の“ことば”は、目に関するよび名ですが、どの“ことば”も“目”という“ことば”からできてきた“ことば”にちがいないと思います。

目のはたらきを、表わしている“ことば”には、なかなかおもしろいものがあります。

みる……………目がものを手のようにいる
 という意味です。つまり“目いる”

から“見る”という“ことば”になってきたと辞書に書いています。
 めあて……………目をひとところにあてて見る
 ことから、目的、目標、ねらいの意味を表わしています。

まなざし……………ものを見る目のさま。目つき、目のようすです。

めうつり……………目のつけどころがいろいろと移りかわることです。

めくら……………目が暗いという意味からできた“ことば”です。視力を失ってものが見えない人を、よぶようになつたのでしょう。

めだつ……………人の目を強くひくという意味の“ことば”です。

めぬき……………ほかのところより目だっているところの意味です。ほかよりもたいせつなところを言います。

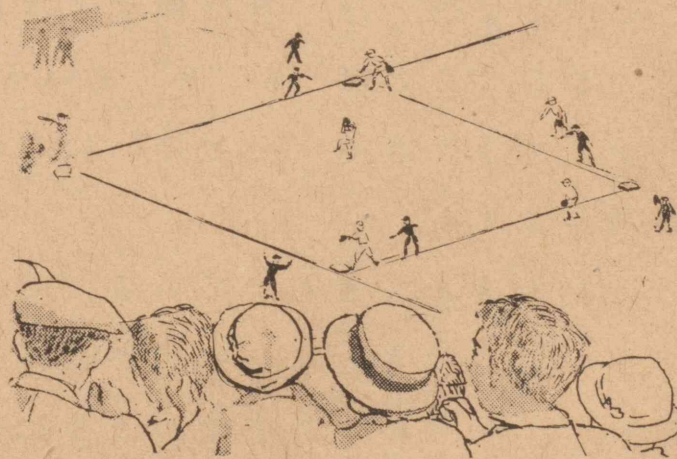


もをつぶす”とか“きもをひやす”などと言うのも、これと関係があるようでおもしろいと思います。

強く感動したことを表わすのに、“むねをうたれる”“むねにひびく”“むねをえぐられる”などと言います。こうなると、心ははらにあるよりも、むねの方にあるような感じがします。悲しみのために“むねがはりさける”とか“むねがいたくなる”“むねがいっぱいになる”と言ったりします。こういう場あいは、けっして、“はらがはりさける”“はらがいたい”“はらがいっぱい

になる”とはいいません。喜びや悲しみの心がむねにあるように思ったのは、何となく自然のように考えられます。

“あおすじをたてる” “はをくいしぼる” “めをむく” “はがゆい” “おくばにものがはさまる” “てにあせをにぎる” “かたをいからす” などという“ことば”は、人間のからだつきによって、感情を表わしている“ことば”でしょう。こういう“ことば”は、まだたくさんあげられます。



のです。そこでわたしは、“からだ”に関係のある“ことば”を気がついたらすぐノートに書きとって集めてみたのです。そして、国語辞典で調べたり、おとうさんや先生に質問したりして、研究を続けています。

これからその発表をいたします。

まず最初に気がついたことは、からだの部分を表わす“ことば”は、単じゆんなものが多いということです。たとえば、“め”“て”“け”“は”のように、一音一文字で表わされるものがあります。また、“みみ”“ちち”“もも”などのように、同じ音が重ねられているものもあります。音がちがっても、“くち”“はな”“むね”“はら”“あし”“ゆび”“つめ”のように二音のものが多のです。このように、“からだ”の部分のよび名が単じゆんな“ことば”で表わされているのには、きっと、何か理由があ

るだろうと思われませんが、今のわたしには、わかりません。

次に、からだに関係の深い“ことば”について、ノートから拾って述べてみましょう。

“おこる”ことを“はらがたつ”と言ったり、びくびくしないことを“はらがすわる”と言いますね。これは、古い時代の日本人は、心のはらの中にあると考えていたからではないでしょうか。心のわるい人のことを、“はらぐろい”人だ、と言います。だいたんで、びくびくしない人のことを、“ふとっぱら”の人だ、と言います。また、相手の人の考えているのを、見ぬくことを、“はらのそこをみすかす”と言うのも、やはり心のはらの中にあると考えていたことを表わしているように思われます。

また、ひどくびっくりしたことを、“き

(一) からだとことば

ある日、わたしは“からだとことば”について研究してみようと思いました。それは、わたしたちがふだん使っているからだに
関係のある漢字が、実物の形から作られているものが多いということから思いついたのです。

たとえば、目、口、手、足、耳などの漢字は、実物の形から絵のような文字ができて、しだいに今のような文字になってきたのだといわれています。これを図に表わすと、次のようになります。

このような文字とは別に、わたしたちが日常生活に使っている“ことば”の中にも気をつけて見ると、からだの名まえから成りたっているものが少なくないようです。



わたしは、初め、わずかばかりのからだに深い関係のある“ことば”を集めて、国語辞典で調べてみたり、それについて考えてみたりしましたら、おもしろくなってきた

六 ことばの研究

わたしたちが日常なにげなしに使っている“ことば”について心をとめて考えてみますと、案外、正しいわかりかたをしていないようです。

“ことば”の生活をもっと正しく豊かにしていくためには、もっと正しい理解をもたなければならないと思います。なにげなく、話したり、聞いたり、書いたり、読んだりしている“ことば”について、反省の目を向けて、深く考えてみたり、調べてみたりすることによって、正しい“ことば”の使い方がよくわかってくるものです。

この課は、そうしたなにげない“ことば”に注意し始めて、反省したところから生まれた6年生の研究発表です。

こうした研究をすることはたいせつな国語の勉強です。“ことば”の研究をする場あいには、まず第一に研究をする問題を見つけること、次には、その問題をどんな順序で研究していったらいいかを考え

てきめることです。そうして、その研究をしんぼう強くやりとおすということがだいじです。

“転校してきた友だちのことばとわたしたちのことばのちがい”“外来語の研究”“方言集め”“ことばあそびについて”といったおもしろい研究問題を見つけてください。よく考えてみると、みなさんのまわりから、たくさん問題が見つかるはずです。そして研究したことは、こまかに記録することが必要です。

なお、その“ことば”をローマ字で書き表わして、くらべてみることも、“ことば”の研究を進めていく上に役だつことをわすれてはなりません。

みなさんも、この課の研究を出発にしてふだん使っている“ことば”について深く考えてみて研究してみましよう。

(1) まず読んでみましょう。だまって読んだら次は声を出して読んでみましょう。

空の色や山の色が見えますか。森の中の小鳥の音がきこえますか。このようにすっかり詩の世界へはいつて読めたらすばらしいですね。

(2) わからない植物(ボケ)や、動物(ライチョウ・イワツバメ)があったら調べましょう。

(3) 山へ登ろうという意気込みがよく表現されているところはどこですか。

目や耳がよく働いていて、それがうまく表現されているところはどこですか。

(4) 何べんも朗読してみましょう。

(5) 次のことばを使ってごらんください。

○こんもりした ○きんもつ ○はんらん

五 子ジカものがたり

1. ものがたり

○おかをかけおりにて風のような速さでとんできた子ジカは、どんなようすをしていましたか。

○弟はなぜ肉を小ぎれに切ったのでしょうか。

○子ジカのかわいらしいようすはどこによくあらわれていますか。

○何か黒いものが、かなあみの前にいたとありますが、それは何でしたか。

○子ジカはどうなりましたか。

○弟はどうしてすすりないたのでしょうか。

2. 子ジカ

○どんな感じがしますか。感じたことをノートに書いてみましょう。

○親ジカと子ジカの動きと、静かな森のけしきとを心にえがきながら朗読してみましょう。

3. シナリオ

○“ものがたり”と“シナリオ”と書きあらわしかたが、どちらがっていますか。

○子ジカに対する少年の心もちがどこによくあらわれていますか。

○少年はどうして高いさくを作ったのですか。

○かきあらわしかたのうまいと思うところをノートに書きぬいてごらんください。

六 ことばの研究

○からだに関係あることばを書き集めてみましょう。

○国語辞典のひきかたを覚えて、ことばを調べてみましょう。

○この課に出ている目に関係することばの使いかたを調べてみましょう。

○じぶんの名まえや住んでいる土地の名まえについて調べてみるとおもしろいことがわかるでしょう。

できるように練習しましょう。

三 博愛の天使

(1) まず全文を通読しましょう。

○博愛の天使とはだれのことですか。

○博愛・天使の意味を調べましょう。

○フローレンスのおさないころのお話の要点をノートに書いて
ごらんなさい。

りすのお話

病人のお話

本の読み方

○フローレンスが、いつも心の中で考えていたことというのは
どんなことですか。

○フローレンスのゆめと願いというのは何ですか。

○フローレンスが、この願いをおかあさんにお話したとき、お
かあさんは何とおっしゃいましたか。

○両親に連れられてローマに旅行した時、フローレンスの心を
いちばんひきつけたものは何でしたか。

○おさないフローちゃんの望みが、ようやく達せられたのは何
才の時でしたか。

○クリミア戦争が起こった時、フローレンスはどうしましたか。

○戦争が終って、フローレンスはどんな仕事をしましたか。

(2) あなたは“博愛の天使”を読んでどう思いましたか。感想を
ノートに書いてごらんなさい。

(3) フローレンス・ナイチンゲールは、小さい時から、ゆめと願

いを持って大きくなりました。そうしてとうとうその願いを
かなえることができました。あなたは、どんな仕事をして一生
をすごしたいと思っていますか。あなたのゆめを作文に書いて
ごらんなさい。

(4) 次のことばを使って短い文を作ってごらん

○ひろびろとした

○われさきにと

○歓げい

○きちょうめん

○しあわせ

四 登 山

1. ビッケルの思い出

(1) ビッケルの思い出をよく読んで次の問題の答をノートに書き
なさい。

○ビッケルは登山の時どんな役にたつのですか。

○シェンクのビッケルというのはどんなものですか。

○ビッケルがじゃまになるのはどういう時ですか。

○まきさんが登ったというカナダのマウント・アルバータを地
図で調べてみましょう。

○かべのようになった山に登るのに十六時間も努力したという
苦心のようすを想像してみましょう。

○ただきに着いた時の気持を想像してごらんなさい。

(2) ビッケルの思い出の感想をノートに書きなさい。

(3) あなたの登山(または遠足)の思い出を作文に書いてごらん
なさい。

2. 山へ登ろう

学 習 の 手 引

一 春 の 光

春の詩を味わって読んでみましょう。

1. 日 光

○春の光がどこに満ちているのですか。

○どんなけしきが目にうかびますか。

○この詩を何度も、よく読んで、朗読しましょう。

○みなさんの庭の中から“春”をさがしてごらんなさい。

2. ぼくのかいたおかあさんの顔

○この詩を読んでどんなようすを思いうかべますか。

○作者はおかあさんに対してどんな感じをもっていると思いますか、それはどこでわかりますか。

○明かるい感じがしますか、暗い感じがしますか。

3. 母 の 日

○去年の母の日にはどんなことをしましたか。今年にはどんなことをしておかあさんを、喜ばせるつもりですか。

○この詩では、どんなことをして喜ばせていますか。

○母の日にじぶんのしたことを、文や詩に書いてみましょう。

“春の詩”や“おかあさん”の詩を書いてみましょう。

つぎの文字やことばの使いかたを練習しましょう。

○満ちて ○顔 ○似る ○感謝 ○てりかえす

二 お話 二つ

1. 少年のクラブ

(1) よく読んで、要点をノートに書いてみましょう。

○少年のクラブには何才から何才までの人が入れますか。

○少年のクラブの設備。

○少年のクラブではどんなことをするのですか。

○このクラブをいじめるお金の出どころ。

○どうして少年のクラブが作られるようになったのですか。

○少年のクラブができてから、アメリカの少年たちはどうなりましたか。

(2) 少年のクラブを読んで、あなたはどんな感想を持ちましたか。ノートに書いてごらんなさい。

(3) 聞きとりをしましょう。

聞きとりというのは、人に文章の一節ずつを読んでもらって、それをノートに書く勉強です。くぎりを長く読まれるとなかなか書けないものです。でも練習するとだんだんじょうずになります。

2. けむりのゆくえ

(1) よく読んで、要点をノートに書き取りましょう。

○けむりをけんび鏡で見るとどんなに見えますか。

○けむりのつぶの、大きさやじょうたい。

○けむりのつぶは何からできていますか。

○けむりが空にのぼっていくうちに消えてしまうのはなぜですか。

○風によって空の旅へとのぼっていったけむりのゆくえはどうなるのですか。

○田園のきりや、空にうかぶ白雲のつぶのしんは何ですか。

(2) ノートに書いた要点を見ながら“けむりのゆくえ”のお話が

めくら.....(25)	やりがたけ.....74	流行病.....55
めざましい.....16	やりとおす.....(17)	両岸.....16
メジカ..... 101		リンゴ.....97
目じるし.....(26)	ゆ快(に).....14	林道.....71
めった(に).....29	ゆき届いた(く).....72	レオナード.....85
めぬき.....(25)	豊かに.....37	連合軍.....55
めぼし.....(26)		ローマ.....43
メモ.....13	ヨーロッパ大陸.....42	朗読..... 5
	用具.....63	ろ營.....71
申し出る.....19	養成.....57	路地.....17
目標.....(25)	横はら..... 112	ロンドン.....32
木工.....18	夜ぞら.....26	わがまま..... 9
もてはやされれば...46	よび求めて..... 102	悪気..... 111
もともと.....31		われ目.....62
もはや.....63	らい雨.....68	
もも.....(20)	らいげき.....75	
モン・ブラン.....61	来月.....(33)	
	ライン川.....53	
屋しき.....39	ラテン語.....43	
野じゅう.....72		
やに.....28	ライ・ハースト.....41	
山かど.....67	理解.....54	
山ぐつ.....63	理くつ.....26	
山すそ.....72	理はつ.....69	
山ネコ.....98	理由.....34	

漢字 ○印は当用漢字

○将(4)	欠(4)	現(5)	示(5)	整(5)	型(5)	律(5)
○朗(5)	在(12)	念(12)	課(13)	快(14)	供(14)	職(15)
費(15)	市(15)	○紡(17)	績(17)	○揮(17)	申(19)	罪(19)
犯(19)	減(19)	訓(20)	総(20)	権(20)	制(20)	主(20)
幹(20)	潔(21)	加(22)	規(22)	則(22)	築(23)	○徑(27)
仮(27)	液(27)	奮(36)	豊(37)	帯(37)	歛(41)	師(43)
慣(43)	養(43)	憲(43)	濟(44)	○看(47)	護(47)	婦(47)
省(48)	許(49)	○孤(52)	打(54)	保(55)	軍(55)	兵(55)
有(55)	敵(55)	墓(57)	故(57)	筆(58)	銅(65)	宮(67)
存(69)	脈(69)	準(69)	応(76)	○映(81)	比(81)	速(82)
疑(100)	弁(111)	耕(112)	株(112)	倉(117)	易(117)	視(132)

なにげなし……(16)	バーセノーブ……38	日ごろ……121
なみ木道……37	ハーバート大学……74	ビッケル……58
成り行き……(28)	配列……5	ひつつかんで……91
	ばかにして(する)……56	百分の一……31
荷うま……70	はがゆい……131	氷河……61
西ほだか……67	博愛……36	表現……5
二発……116	はじき落とし……117	びん感……109
ニュー・	橋わたし……62	
イングランド……17	発揮……17	プール……14
入所……55	発奮……36	フーレル……70
	はて知らぬ……29	ふさわしい……57
ぬって……109	鼻づら……105	ふしあな……26
	はなやか……42	ふし目がち……45
ねうち……66	はめ板……91	ぶとう会……45
ネキリムシ……114	はらぐろい……129	ふとっばら……(21)
ねだる……97	ばらまかれる……29	ふみ荒して(す)……111
ねまき……99	バリ……45	フラッグ……111
	はりさける……(22)	フリードナー牧師……53
ノーマンス・ランド	反省……48	ふりそそいで……4
……71	ハンブシャー州……41	奮い立たせる……36
ノールウェー……34	バンフレット……21	ブルクナー……68
野育ち……120	はんらん……79	ふるさと……102
延びて……116		フローレンス……37
のみこめました(む)	ひきこまれる……23	ふんわり……86
……87	びくり……92	

兵……55	まごまご……93	身じか(な)……5
減って……19	まざまざ(と)……(30)	みじめ……17
弁解……111	まして……94	水音……77
	またたき……(26)	みすかす……(21)
方言……(17)	まつ毛……79	店さき……18
方しん……43	まつわる……59	みせもの……(30)
法人組織団……20	まと……(30)	道すじ……16
紡績工場……17	まどう……(26)	満ち満ちた……54
ぼう立ち……85	まなこ……(24)	みっともない……(27)
放電……67	まなざし……(25)	みとおし……(28)
ほうむられ……57	まなじり……(24)	見とれ(て)……39
ほかなりません……26	まぬけ……(30)	みにくい……(27)
ボケ……77	まのあたり……(27)	見ぬいて……84
保護……72	まぶか……(26)	——ミリメートル……27
ほこらしく……66	まぼろし……(30)	みるま(に)……16
保存……69	まゆ……(30)	みわける……(28)
ほだかだけ……74	まる木小屋……82	
ほどこし……65	まるで……42	むやみ……17
保養院……55		群らがる……39
本場……61	見合せ……100	
	見おろし(たり)……38	めあて……13
マウント・	味方……55	メイ……54
アルバータ……69	みぐるしい……(27)	名品……66
任せきり……43	みこみ……(26)	めうつり……(25)
まきちらかされた……17	見さだめ(て)……(28)	目がけ……83

自由律.....5	ずい筆ふう.....58	前者.....12
じゅ海.....77	水 平.....25	全 身.....112
修 業.....54	スエーデン.....34	戦 線.....56
祝 福.....4	すがすがしい.....54	戦(前).....32
首 都.....32	すぐれた.....36	全 速 力.....82
ジュネーブ.....61	す す.....16	千分の一.....27
正 直.....21	すすりなく.....108	全 力.....48
正 体.....24	すそ野.....77	ソールスベリ.....49
商 売.....21	ステッキ.....60	倉 庫.....117
じょう発.....29	すなお.....5	そなえ.....15
少年クラブ.....12	スポーツマン	ダーウェンド川.....37
将 来.....4	・シップ.....21	題 材.....80
勝 利.....56	住 ま い.....82	たい在中.....42
上流社会.....42	住みこんで.....52	大 す き.....44
しょげて(る).....111	清 潔.....21	体 操 場.....14
ジョーデー.....111	政 治.....21	だいたん.....(21)
しりごみ.....88	ぜいたく.....42	大ていたく.....37
印.....44	成 長.....43	対物レンズ.....24
—し ろ.....21	制 度.....52	大 部 分.....42
し わ ざ.....116	生年月日.....57	台 本.....81
心 理 学.....43	西 部.....19	大 満 足.....98
すいじ係.....70	せきの山.....18	たいらげて(る).....93
水じょう気.....29	説 話 体.....12	大 理 石.....57
ス イ ス.....45	せわしく.....47	

耕 そ う.....112	つづげさま.....83	テント生活.....15
たたえて.....45	つたつた.....72	銅.....65
漂 っ て.....30	努 め.....57	同 一.....80
立ちならぶ.....16	つ ぶ.....26	東部アメリカ.....16
たつとばれ.....63	つまった.....16	トウモロコシ.....114
たてこもって.....34	罪.....19	都 会 地.....32
旅 先.....52	つ ら い.....107	特 別.....20
たらす(と).....28	つるはし.....60	登 山.....58
だ ら り.....91	テ ー マ.....58	登 山 家.....58
単じゅん.....(20)	手足まとい.....67	ド・リシュール.....61
チシャの葉.....97	庭 園.....37	整 っ た.....5
ちちぶの宮.....67	定 型 律.....5	とどめて(る).....20
チューインガム.....97	て こ.....112	と ほ う.....107
ち ゅ う.....83	手 広 く.....20	ともしび.....108
注 文.....65	手 本.....66	ともって.....47
ちょう上.....68	手みじか.....88	どよもす.....78
直 径.....27	てりかえして.....11	とらわれない.....5
	デルビシャイ州.....41	取 り こ.....39
通 知.....76	田 園.....32	トリニタ・ド
ツェルマット.....69	転 校.....(17)	・モンテイ寺.....52
つきこんで.....56	天 国.....37	ナイチンゲール.....36
つきはなし.....106	天 使.....36	なえどこ.....111
つくりばなし.....84	電子けんび鏡.....27	長 年.....76
つたって.....99	天子さま.....75	

おじょうさん……39	かけぬけて(る)……96	ぎっしり……16
おせんこう……24	かけら……73	記念日……13
おそうじ……11	かこいこむ……94	起ふく……109
おつかい……11	かしら文字……57	きも……(21)
お根……68	家庭教師……43	疑問……100
おのずから……59	かなあみ……95	きゃしゃ……96
お墓……57	かなえられない……42	教科書……21
おふろ……15	カナダ……69	きょうだい……80
おやつ……10	カナディアン・	教養……43
応えん……76	ロッキー山脈……69	きり……30
おり……95	かの女……45	切り株……112
おりよく……70	画面……112	きりぬける……94
	仮(に)……27	きんもつ……78
課……13	軽い……67	
カーター博士……74	歓げい……41	食いこむ……36
カーネーション……10	看護(婦)……47	鎖……112
カーフェア……42	幹部……20	クッキー……97
会(員)……12		くらがり……101
カイゼルスベルト	ぎせい者……55	クラブ……12
……53	(社交)季節……42	くりひろげられ
会費……15	規則……22	(ます)……4
外来語……(17)	気体……29	クリミア戦争……55
かがやかしい……4	期待……4	クリミア半島……55
学習……4	きたえあげた……60	グリンデルバル……64
かけこむ……83	きちょうめん……44	クルミ……38

訓練……20	古風……37	しずく……32
	ごみ……17	し勢……109
ゲームごと……18	根きょ地……72	しだ……92
ケーラー……34	こんごうづえ……60	自治権……20
結局……72		じっくり……36
結こん……54	細工……14	実物……(18)
ケルン……73	ザイル(なわ)……78	辞典……(18)
言語……(32)	さつえい機……69	指導……19
検査……15	さとうがし……97	シナリオ……5
現在……12	さらされ(ながら)……73	しばしば……30
建築……23	さらって……35	市病院……55
見当……(26)	山がく地帯……37	しゃがみこんで……113
憲法(史)……43	三か所……41	市役所……15
コーレル……70	産業……16	社交界……45
公共……15	さんざん(に)……111	——しやすく……29
後者……12	山村……64	ジャスパー……70
光線……25		ジャックナイフ……91
故きょう……57	シェンク……64	シャワー……15
国営……20	シカがり……82	主(として)……20
国立公園……71	しぐさ……39	じゅう……115
心がまえ……81	しげき……62	集会所……14
孤児院……52	しげみ……92	習慣……43
固体……27	ししゅう……77	従軍……57
こっけい……39	辞書……(25)	十分の一……27
ことさら(に)……21	死しょう者……55	重要……5

新しく出たことば

アイガー.....68	生かして.....5	うっとり.....109
愛らしさ.....45	いからず.....(23)	うまかた.....70
あき(地).....16	いく分.....107	うようよ.....27
あく手.....73	池.....28	うわさ.....46
あくる年.....53	いじ.....15	運命.....12
アサンスカ.....71	石づき.....60	映画.....81
足場.....60	いたずら半分.....97	液体.....27
味わって.....5	一年児.....111	えぐられる.....(22)
あたいする.....(27)	一万分の一.....27	エジプト.....53
雨つぶ.....35	一流.....45	えだ葉.....22
あま寺.....52	一句.....5	エムプリ・パーク.....41
雨戸.....26	一てき.....28	エロウ墓地.....57
アマハ.....63	いどころ.....102	オーバーリン.....75
あらすじ.....13	営み方.....20	おいとま.....49
あわれみ深い.....41	イニシアル.....75	大シカ.....71
案内人.....70	いのちかけ.....84	王女様.....43
暗室.....69	いやらしい.....(27)	犯したり(す).....19
	医りょう品.....69	おくほだか.....67
	イワツバメ.....79	おさない.....55
言いつけられた		おし切り.....56
(ところ).....117		
いよいよもない.....45	ウィムバー.....62	
家がら.....41	打ち負かされ(て).....54	

Copyright 1950, by
The Nihon Shinkyōiku Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof
may not be reproduced in any manner whatsoever
without permission in writing from the authors.

小国615

左の作品を本書に掲載させていた
だきましたことについて、著作者諸
先生に心から感謝をいたします。
なお、諸規則および指示によりま
して、漢字・かなづかいその他多少
の修正をおわびいたします。

「日 光」.....北原 白秋
「ぼくのかいたおかあさんの顔」.....長崎源之助
「けむりのゆくえ」.....立花 太郎
「博愛の天使」.....諏訪 三郎
「ピッケルの思い出」.....榎 有恒
「山へ登ろう」.....村野 四郎
「子ジカ物語」.....吉田甲子太郎

感謝

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

昭和二十五年	昭和二十五年	昭和二十五年	昭和二十五年
月	月	月	月
日	日	日	日
印刷者	発行者	著作者	発行者
学校図書株式会社	学校図書株式会社	財団法人 日本新教育研究会	財団法人 日本新教育研究会
代表者 川口芳太郎	代表者 川口芳太郎	代表者 高橋誠一郎	代表者 高橋誠一郎
東京港区芝三田豊岡町八番地	東京港区芝三田豊岡町八番地	東京港区芝三田豊岡町八番地	東京港区芝三田豊岡町八番地
発行所	印刷者	発行者	著作者
学校図書株式会社	学校図書株式会社	学校図書株式会社	学校図書株式会社
代表者 川口芳太郎	代表者 川口芳太郎	代表者 川口芳太郎	代表者 川口芳太郎
東京港区芝三田豊岡町八番地	東京港区芝三田豊岡町八番地	東京港区芝三田豊岡町八番地	東京港区芝三田豊岡町八番地

(本書の指導語・ワークブック・註釋並びに、これに類する一切のもの無断發行を禁ずる。)

編者	担当執筆	表紙
東京都大田区雪ヶ谷町 清明学園内 財団法人 日本新教育研究会	成蹊学園小学校主事 成城学園初等学校教諭 学習院初等科教諭 同 成蹊学園小学校教諭	齋藤 長三
理事 濱野重郎 編集長 照井猪一郎	滑川道夫 馬場正男 杉山勝造 松山市三 野村純三 齋藤良彰	さしえ

544

THE UNIVERSITY OF HIRASAKI
LIBRARY

1969

THE UNIVERSITY OF HIRASAKI
LIBRARY

THE UNIVERSITY OF HIRASAKI
LIBRARY

THE UNIVERSITY OF HIRASAKI
LIBRARY

麻
69

広島大学図書
0130449669 69


おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。